

大阪市住吉区

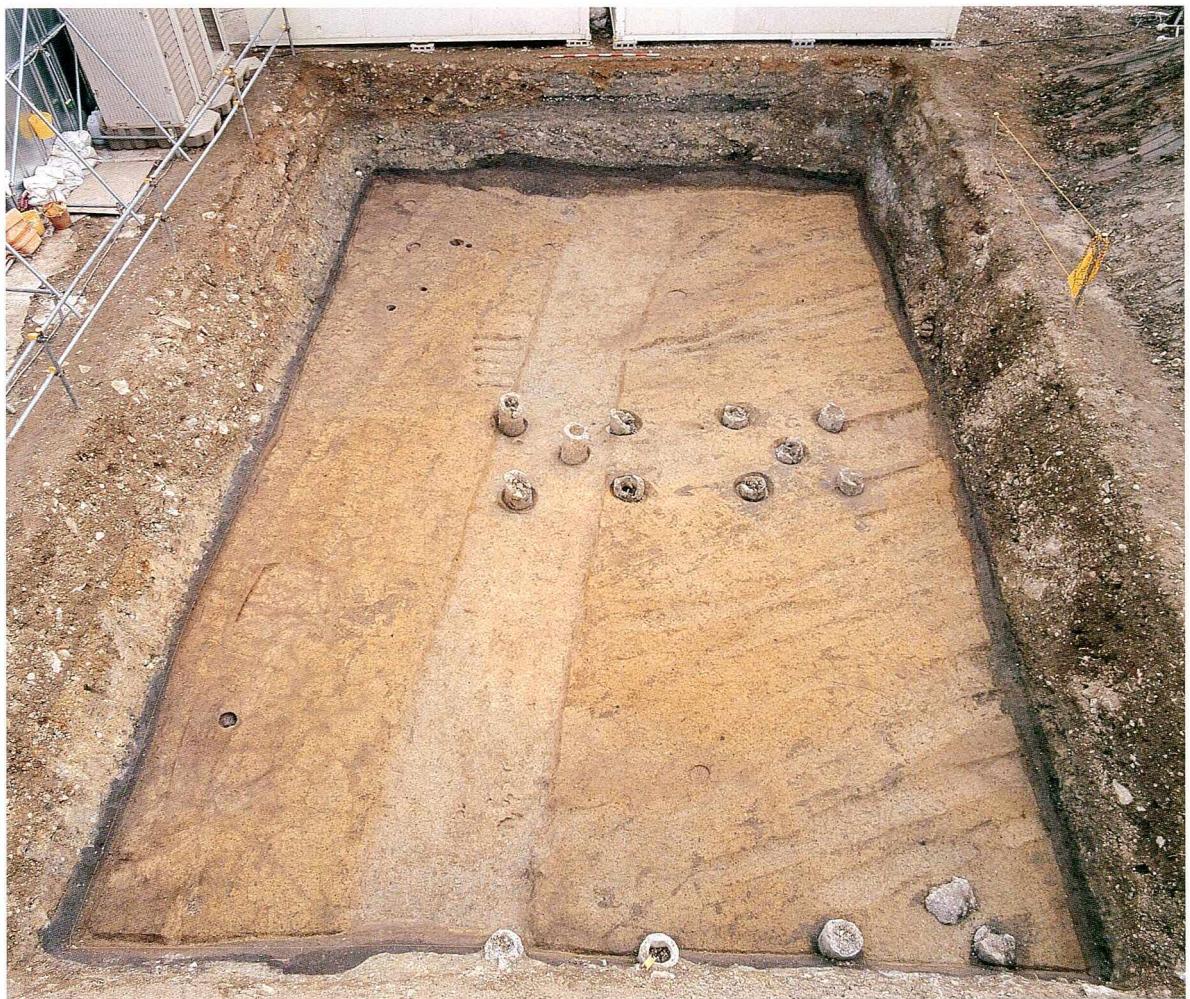
山之内遺跡発掘調査報告

III

大阪市都市整備局による浅香第1住宅建替工事にかかる
発掘調査報告書

2010.3

財団法人 大阪市文化財協会



東区 第3層下面検出遺構全景(北から)

大阪市住吉区

山之内遺跡発掘調査報告

III

大阪市都市整備局による浅香第1住宅建替工事にかかる
発掘調査報告書

2010.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は当協会が刊行してきた『大阪市住吉区山之内遺跡発掘調査報告』シリーズの3冊目に当るものである。調査地の周辺にはこれまでに約10万年前のナウマンゾウやオオツノジカの足跡群が発見された我孫子南中学校をはじめ、弥生時代中期の方形周溝墓群が調査された大阪市立大学など山之内遺跡を特徴付ける調査地がある。本調査では、中世～近世にかけての鋳造関係資料によって当地域にも鋳物師集団が存在したことが裏付けられるなど、山之内遺跡の中央部に位置する当地域の具体的な状況を詳細かつ総合的に明らかにするための資料を提供したといえる。これらの資料を従来の研究成果を踏まえた上で総合的に検討すれば、周辺地域を含めた歴史的変遷過程を把握しうるものと期待される。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで種々のご尽力をいただいた大阪市都市整備局をはじめとする関係諸機関、ならびにご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様に心より御礼申し上げる。

2010年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇田 修

例　　言

- 一、本書は、財団法人大阪市文化財協会が大阪市の委託を受け、2009年1月6日から3月31日にかけて住吉区浅香2丁目で実施した浅香第1住宅建替工事にかかる山之内遺跡発掘調査(YM08-4次、YMは山之内遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会文化財研究部次長南秀雄の指揮のもとで同部技術管理・保存科学担当課長田中清美が担当した。調査の期間は第Ⅱ章に示す。
- 一、本書の執筆および編集は、田中が行った。本書の用字用語や体裁等の調整は、田中のほか、同部事業企画課担当課長代理清水和明、同部難波宮調査事務所長高橋工、同部事業担当係長佐藤隆、同部学芸員小倉徹也らの報告書校正委員が行った。
- 一、基準点測量および空中写真測量は株式会社かんこうに委託した。
- 一、遺構写真は田中が撮影し、遺物写真の撮影は写房楠華堂内田真紀子氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には、多くの補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡　　例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語、および断面図に示した岩相のパターンは、[趙哲済1995]に準じる。
2. 本書における地層名は第○層と表記する。また、各遺構埋土の地層名は「第」をとつて○層とのみ示し、調査地の地層名と区別する。
3. 遺構名の表記は、溝(SD)、土壤(SK)、水田畦畔(SR)の分類記号の後に、3桁の番号を付した。
4. 本書における遺物番号は、すべて1からの通し番号を付した。
5. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mと記した。また、挿図中の方位は図1が真北である以外はすべて座標北を使用した。
6. 本書で用いた地層の土色および土器の色調は[小山正忠・竹原秀雄1967]に拠った。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 山之内遺跡の立地とこれまでの調査 1

 第1節 遺跡の立地 1

 第2節 歴史的環境と周辺の調査 3

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過 7

第Ⅲ章 調査の結果 9

 第1節 層序 9

 第2節 江戸時代の遺構と遺物 13

 第3節 近代～現代の遺構と遺物 16

 1) 第2層下面検出遺構 16

 2) 第1層上面検出遺構 18

 第4節 各層出土の遺物 19

第Ⅳ章 調査成果のまとめ 25

引用・参考文献 29

索引

英文目次・要旨

図 版 目 次

- 1 地層断面(一)
上：東区 南壁断面(北から)
中：東区 北壁SR101断面(南から)
下：東区 東壁断面(西から)
- 2 地層断面(二)
上：東区 東壁断面および第5層中の自然礫の分布状況(西から)
中：東区 深掘りトレンチ北壁断面(南から)
下：西区 西壁断面(東から)
- 3 近・現代の遺構(一)
上：東区 SR101全景(西から)
下：東区 SR101全景(南から)
- 4 近・現代の遺構(二)
上：西区 第2層下面遺構検出状況全景
(南から)
下：西区 第2層下面検出遺構全景(南から)
- 5 江戸時代末～近・現代の遺構
上：西区 第2・3層下面検出遺構全景
(南から)
下：西区 第2層下面検出の偶蹄類足跡群
(南から)
- 6 江戸時代末の遺構
上：東区 第3層下面の遺構検出状況全景
(北から)
下：東区 第3層下面検出遺構全景(北から)
- 7 出土遺物(一)
8 出土遺物(二)
9 出土遺物(三)
10 出土遺物(四)
11 出土遺物(五)

挿 図 目 次

- 図1 山之内遺跡の位置 1
図2 山之内遺跡と周辺の遺跡分布図 1
図3 遺跡の立地と周辺の地形分類 2
図4 調査地周辺図 3
図5 近代の調査地周辺図 5
図6 調査区配置図および旧石器調査時のグリッドの配置図 7
図7 地層と遺構の関係図 9
図8 東区東壁および西区東・南壁断面図 10
図9 西区北壁・西壁断面図 11
図10 SD301断面図 13
図11 第3層下面検出遺構平面図 14
図12 鋤溝群出土遺物実測図 16
図13 第2層下面検出遺構平面図 17
図14 東区第1層上面検出SR101平面・断面図 18
図15 第1層出土遺物実測図 19
図16 第2層出土遺物実測図 20
図17 第3層出土遺物実測図 22
図18 第2・3層出土遺物実測図 23
図19 調査地の変遷 26
図20 「堺下源」刻印瓦拓本 27

表 目 次

- 表1 層序表 12

写 真 目 次

- 写真1 YM86-43次調査で検出した弥生時代中期の方形周溝墓群 4
写真2 東区調査状況(西北から) 8
写真3 西区旧石器調査状況(南から) 8

第Ⅰ章 山之内遺跡の立地とこれまでの調査

第1節 遺跡の立地

山之内遺跡は、大阪市住吉区の東南部にある山之内、杉本、浅香に位置する(図1)。遺跡の西側は遠里小野遺跡、東側を依羅池跡および苅田9丁目所在遺跡と、北側は我孫子城跡伝承地に接し、東西1.4km、南北1.5kmの範囲が埋蔵文化財の包蔵地として指定されている(図2)。今回発掘調査を実施した地区は、山之内遺跡の中心域に位置しており、周辺ではこれまでにも数次に及ぶ調査が行われているが、近世以降の大規模な耕作地の開発や耕作によって大きく改変されており、中世以前の土地利用の実態や景観については不明な部分が多い。

当地域の地形は、南の泉北丘陵から北に派生した上町台地である。

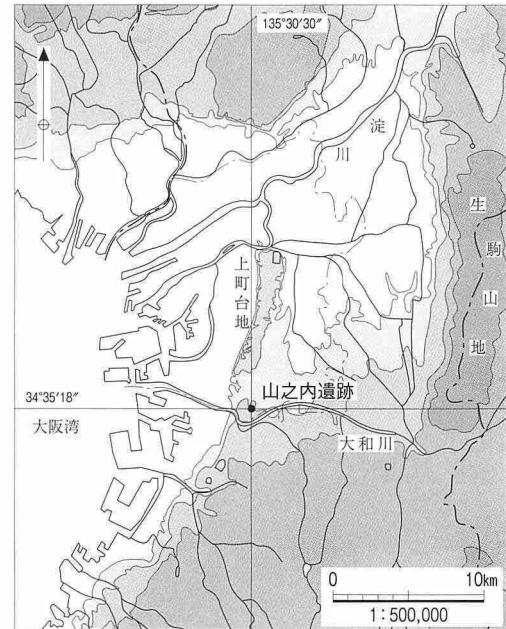


図1 山之内遺跡の位置



図2 山之内遺跡と周辺の遺跡分布図

(遺跡範囲は大阪府地図情報システム上の「文化財情報」[大阪府教育委員会(平成19年9月作成)]を利用)

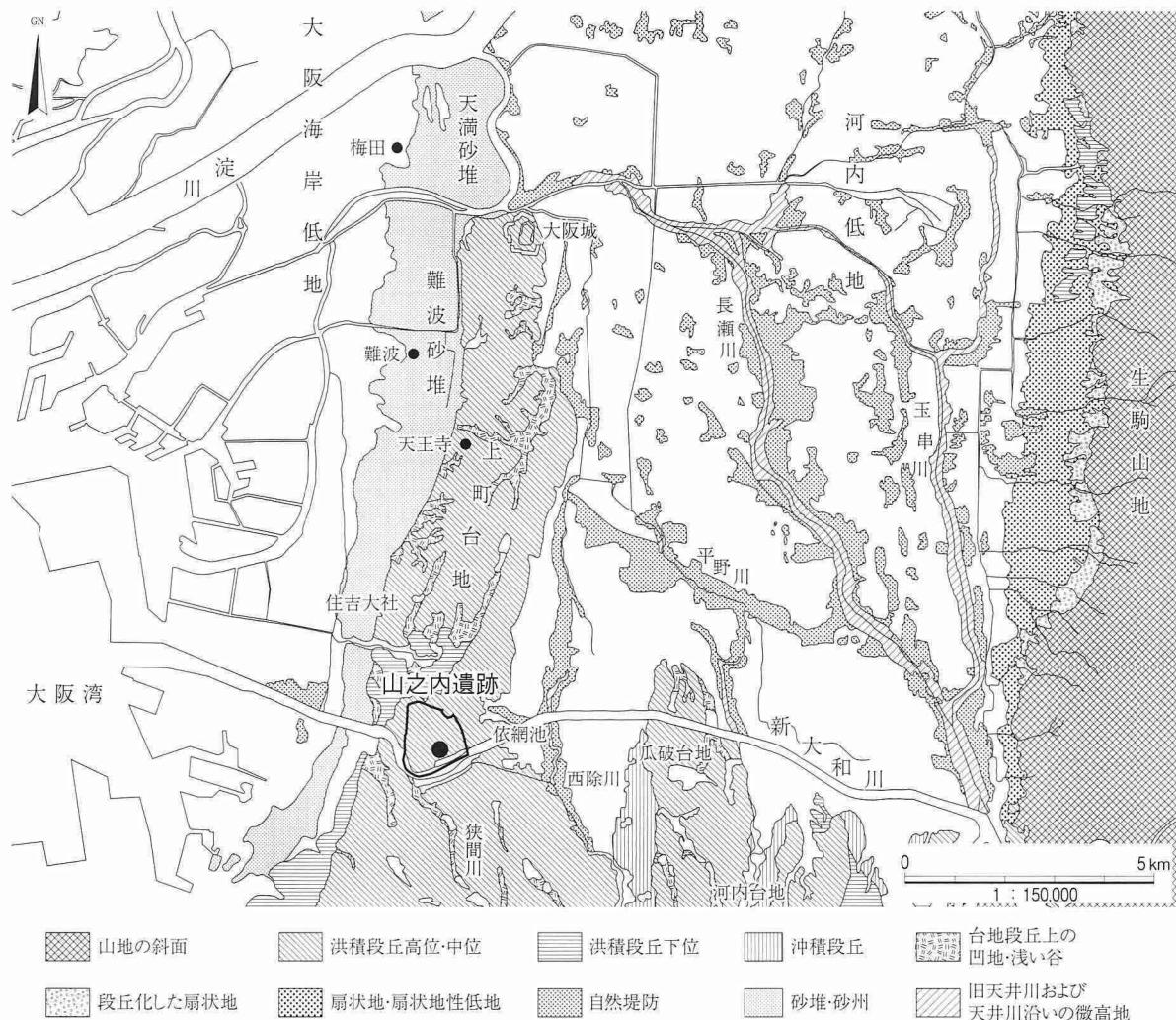


図3 遺跡の立地と周辺の地形分類(土地条件図[建設省国土地理院1983]に一部加筆)

台地の基部付近に当る洪積段丘の高位・中位面に位置しており、南側には西北方向に流れる狭間川の旧河道が、東方には狭山池を源とする西除川の旧河道とこれに沿って南北方向に延びる自然堤防が、北側には細江川が開析した谷地形がある(図3)。遺跡の現地表面の標高はTP+11~12m前後を測る。

遺跡の南部を西方に流れる大和川は、1704(宝永元)年に付替えられた人工河川であり、本来の地形とは何ら関係ないが、大和川が狭間川と合流して北に大きく流れを変える地点から約1kmの間は西側にある台地段丘上の深い谷筋と方向が同じであることから旧状を保っている可能性が高く、ここには遠里小野遺跡[大阪市文化財協会1999・2009]をはじめ、榎津や榎津廃寺[大阪市文化財協会2006、田中清美2008]など古代に当地域で活躍した津守氏と所縁の深い遺跡が点在している。

第2節 歴史的環境と周辺の調査

山之内遺跡は南の泉北丘陵から北に派生した上町台地の基部付近に位置する旧石器時代～江戸時代に至る複合遺跡として知られている。遺跡は戦前に当地域一帯で行われた宅地開発に伴う整地工事の際、弥生時代～平安時代の土器類をはじめ、古代の瓦などが採集されて発見されたが、近年西地区に当る山之内4丁目の山之内市営住宅の建て替え工事に伴って実施された調査では縄文時代前期の土器、弥生時代前期末～中期後葉の集落遺構をはじめ、古墳時代中期後葉～古代にかけての集落遺構などが検出され、上町台地屈指の集落遺跡として注目されている[大阪市文化財協会1998a・1999]。また、山之内遺跡の南地区にある大阪市立大学のグラウンドで実施したYM86-43・88-33次地区の調査では弥生時代前期末～中期後葉にかけての方形周溝墓群をはじめ、弥生時代中期中葉の土器棺墓が検出され、山之内遺跡の弥生時代中期の墓域の1つとして認識されている[大阪市文化財協会1998a]（図4）。

一方、山之内遺跡の東地区ではYM94-26次地区の調査で、平安神宮火山灰層より下位の地層から後期旧石器時代に属するサヌカイト剥片が出土しているほか、北側にあるYM91-12次地区では中期旧石器時代に相当する可能性のあるナウマンゾウやオオツノシカなどの足跡が検出されている。これまで山之内遺跡では中期旧石器時代に属する旧人類に関わる遺物や生活の形跡は確認されていないが、今後調査が進めば発見される可能性がある[大阪市文化財協会1998a]。

縄文時代に関するものは爪形文が施された縄文時代前期に属する土器片をはじめ、石鏃が出土しているが、遺物の量はさほど多くない。また、縄文時代晚期後葉に属する滋賀里Ⅲa式土器が出土していることから、上町台地や西方の大坂湾を生業の場とする人々の営みが窺える。

山之内遺跡が生業の場として大きく変わるのは弥生時代になってからである。本遺跡ではこれまで西地区を中心に弥生時代前期末～中期後葉にかけての土器・打製石器・磨製石器などをはじめ、竪穴建物が44棟、

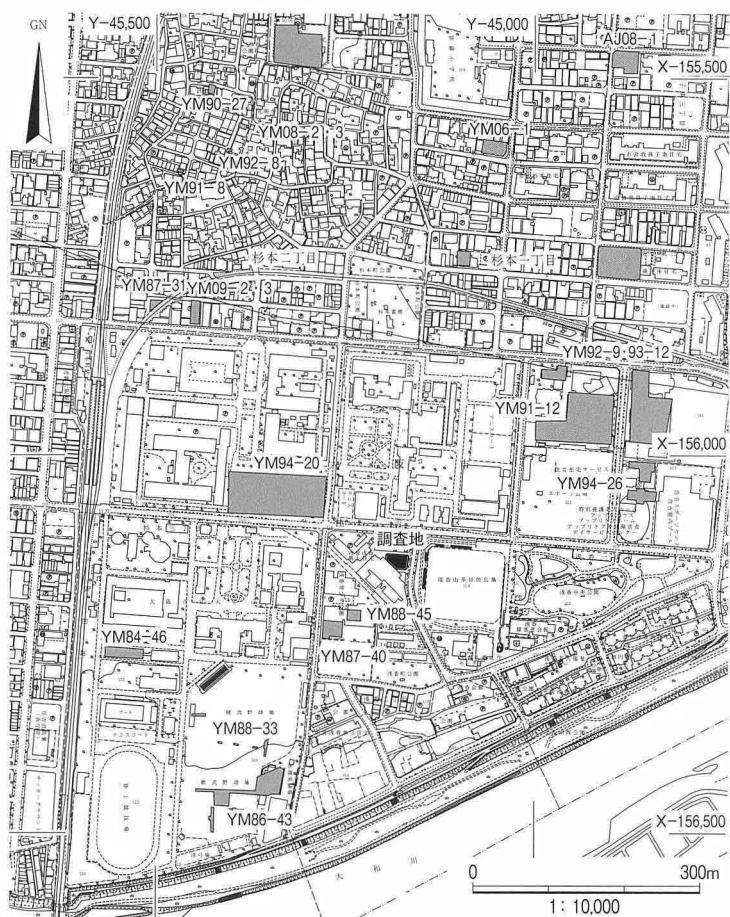


図4 調査地周辺図

掘立柱建物・土壙・柱穴群・溝などの集落遺構が南北約300m、東西約100mの範囲で確認されており、上町台地南部における弥生時代中期後葉にピークを迎える拠点集落として注目されている[大阪市文化財協会1998a・1999]。弥生時代の墓域は既述したように集落の北側に隣接した場所で弥生時代中期中葉～中期後葉に属する小規模な方形周溝墓群から構成された墓域が、集落域の東方約500m地点(本調査箇所の西南350m)に位置する大阪市立大学の構内では周溝の一辺中央が通路状に途切れる弥生時代中期中葉に属する方形周溝墓1基を含む17基の弥生時代前期末～中期後葉にかけての方形周溝墓群および土器棺墓からなる墓域が検出されている(写真1)。つまり、山之内遺跡では上町台地の鞍部に集落域があり、これの北側および東側に墓域が形成されたものと考えられる。このうち、東側の墓域は規模が大きく、造墓時期も集落が営まれた時期と軌を一にしているが、距離がやや離れていることから山之内遺跡以外の集落も含む墓域の可能性がある。なお、集落の北はずれにあるYM83-19次地区では、弥生時代中期中葉に属する墳丘の規模が約12mに達する山之内遺跡で最大規模を誇る方形周溝墓が単独で営まれていた[大阪市文化財協会1998]。この墓の被葬者は、墓の位置や規模からみて、山之内遺跡の拠点集落を統治した有力世帯、つまり共同体首長とその家族の墓の可能性がある。

山之内遺跡では弥生時代中期の集落の範囲内および周辺では、弥生時代後期前葉に属する遺構や遺物がまったく確認されないことから、当該期には集落は他の場所に移動した可能性が高い。同様な状況は山之内遺跡と同様に上町台地上に位置する弥生時代中期前葉～中期後葉の環濠集落であろう桑津遺跡[大阪市文化財協会1998b]、弥生時代中期中葉の4棟以上の竪穴建物を含む集落遺構が検出された南住吉遺跡[大阪市文化財協会1998c]、弥生時代前期中葉～中期後葉の貝塚や弥生土器・石製品・木製品など多岐に渡る遺物が出土した森の宮遺跡[大阪市文化財協会1996]をはじめ、大阪湾沿岸に分布する弥生時代中期後葉の拠点集落でも起こっており、これは弥生時代中期～後期の移行期にそれまでの社会が大きく変貌したことを物語っている。

山之内遺跡では弥生時代後期前葉を迎える頃に一旦集落が廃絶した後、再度集落が営まれるのは古

墳時代中期後葉(5世紀後葉)になってからである。古墳時代(5世紀後葉～6世紀末葉)の集落遺構は、遺跡の南部を中心に分布しており、竪穴建物が6棟確認されているが、このうち、5世紀後葉に営まれた竪穴建物の近くには鉄滓や鞴羽口を伴う鍛冶工房とみられる遺構が伴っていたほか、YM86-18・86-42次調査では同方位の竪穴建物が2棟並んで建っていた[大阪市文化財

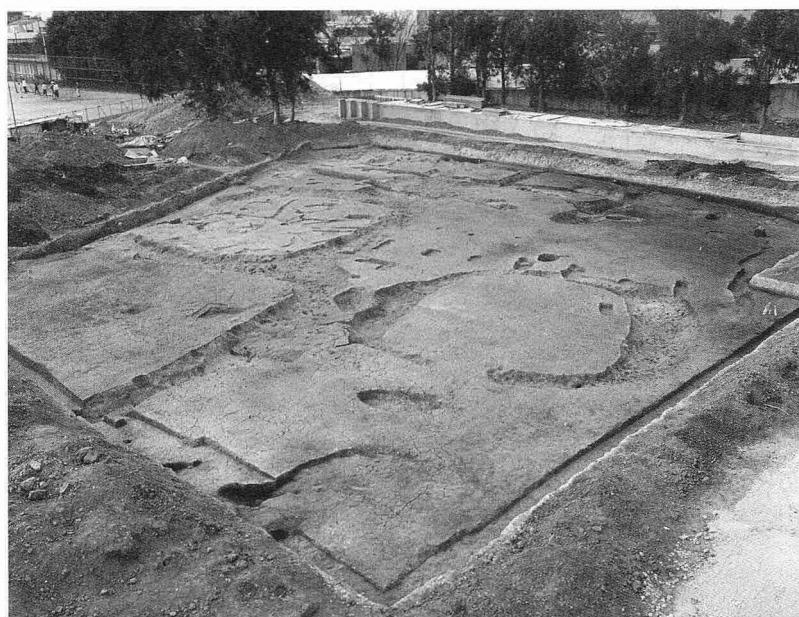


写真1 YM86-43次調査で検出した弥生時代中期の方形周溝墓群

協会1998a]。また、YM83-18次調査地では軟質の韓式系土器や字多型甕などが出土しており、これらは本遺跡の集団が朝鮮半島の南部地域や東海地方など遠距離にある集団とも交易や交流を行っていたことを示唆している[大阪市文化財協会1998a]。

飛鳥～奈良時代の集落は、山之内遺跡の西地区を中心に分布していることが判明している。掘立柱建物の方位は北で東に振るものもあるが、南北に近いものと、北で西に振るものが多いようである。掘立柱建物で時期が確認されている建物の方位は、本遺跡の南地区にあるYM84-46次地区の奈良時代の掘立柱建物のように正南北から大きく振れるものもあることから断定しがたいが、飛鳥時代末葉～奈良時代に属するものは正方位に近いものが増える傾向にあるという[大阪市文化財協会1999]。

一方、山之内遺跡では中世になると東地区の北部および南部で鑄物師関連の鉄滓や坩埚片、鑄型の破片をはじめ、多量の焼土や木炭などの出土が目立って増加する。特に遺跡北部の杉本町二丁目地区ではYM87-31・90-27・91-8・92-8・08-2次調査地などで、13～15世紀代の瓦器や瓦質土器、甑炉の一部とみられる破片、鑄型の破片など铸造関係の遺物をはじめ、炉壁片や焼土、炭などが廃棄された土壠などが検出されている。これらの遺構や遺物は当地域が13～15世紀にかけて「あひこ村」と呼ばれた鑄物師の居住地であったことを物語っている[大阪市文化財協会2008]。さらに本調査地に近接した浅香青少年会館(児童館)の建設に伴うYM87-40次調査では、弥生土器とみられる細片、6世紀後半～7世紀前半に属する須恵器蓋・杯身・高杯・甕、土師器甕、土錘ほかの土製品をはじめ、平面形がやや不整形な大小の土壠が検出されており、当地区も古代の集落の一画に当る可能性が高いことが指摘されている[大阪市文化財協会1988]。

江戸時代以降は調査地域の大半が田園地帯であったことが後述するように本調査によっても明らかにした。1704(宝永元)年には山之内遺跡の南部に大和川が開削される。大和川が大きく北に湾曲する現在のJR阪和線浅香駅の辺りは「浅香の千両曲り」ともいわれ、大和川の付け替え工事の難所であったと伝えている[中九兵衛2004]。

近代の調査地周辺の景観であるが、調査地は当時の地図によれば字西側～杉本新田にかけて位置しており、

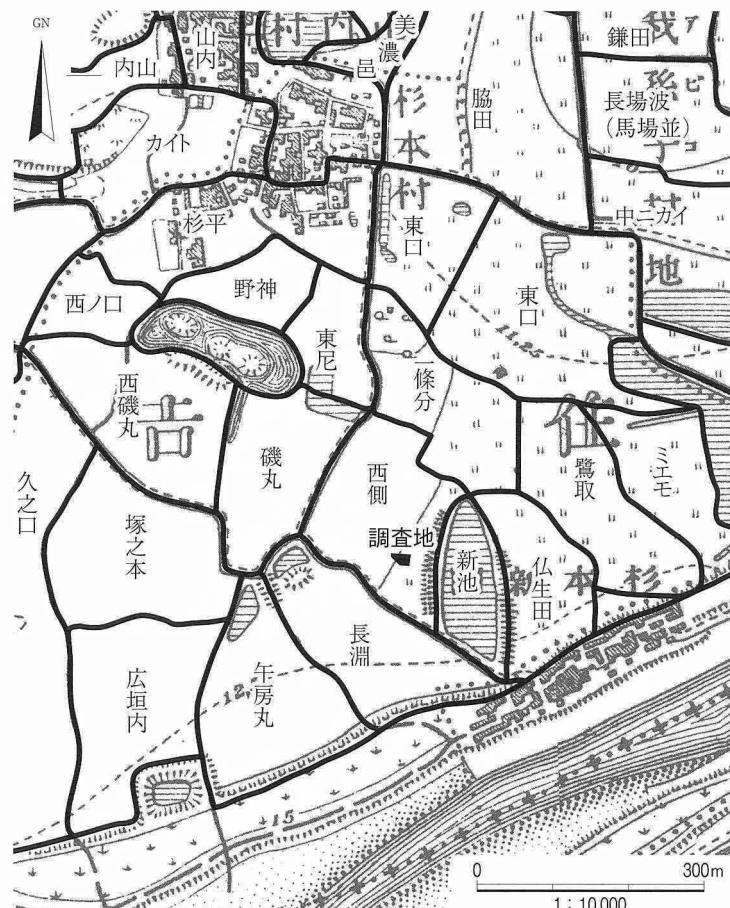


図5 近代の調査地周辺図

(国土地理院発行『1万分の1地形図』1886・1887年に一部加筆)

東側には新池と呼ばれる溜池があったようである(図5)。さらに調査地の周辺を見ると南側には長淵および午房丸が、西側には磯丸、北側には一條分などの字名があり、調査地域は広大な田園地帯であったことを理解しうる[清水靖夫1995]。

次に山之内遺跡に近接する遺跡について概観しておく。

山之内遺跡の西方で接している遠里小野遺跡は、弥生時代後期後葉を主体とする土器類や土錘・イイダコ壺などの漁具が戦前に採集されているほか[藤岡謙二郎1942]、近年の発掘調査によって古墳時代後期～奈良時代前葉にかけての掘立柱建物群・井戸・土壙・溝などの遺構が現在の大和川沿いの地区で広範囲に渡って検出されている[大阪市文化財協会1999・2006・2009a]。

一方、遠里小野遺跡のある住吉郡は、平安時代に編纂された和名抄郷名部には住道・大羅杭全・榎津・余戸の五郷から成ることが記載されており、この内の榎津には白鳳期の複弁七弁蓮華文軒丸瓦を伴う榎津廃寺があった[田中清美2008]。また、当地域には遠里小野遺跡の北方に位置する住吉大社の社家である津守氏を筆頭とする依網氏・我孫子氏等の古代氏族が居住していたとみられている[吉田晶1977]。

「浅香の千両曲り」の東約1.2kmに位置する大和川今池遺跡は古墳時代中期～鎌倉時代にかけての集落遺跡として知られているが、本遺跡では1980年に大和川今池調査会が実施した調査で、南北方向に並行して延びる溝が検出され、これが日本書紀推古21年11月条「自難波至京置大道」と記載された難波宮の中軸線を南に延長した「難波大道」の側溝であることが確認された[大和川・今池遺跡調査会1981]。さらに近年実施された発掘調査によって「難波大道」は、両測溝の距離が心々間で18.8mを測ること、その造成は出土遺物からみて、7世紀中葉に当る孝徳朝に行われた可能性が高いことが指摘されている[三宮昌弘2009]。山之内遺跡と大和川今池遺跡の間には渡来系氏族として名高い依羅氏によって築かれたと伝わる依羅池がある。現在の依羅池は大和川の河道になっているほか、池の大半は埋め立てられて旧状を留めていないが、築造時期は文献等によると5・6世紀まで遡るという。依羅池は大和川の開削時期まで我孫子・苅田・長居方面の耕作地に水を供給した灌漑用の歴史的な溜池であった[直木孝次郎1988]。

依羅池跡と山之内遺跡に南接している苅田4丁目所在遺跡は、近年の住宅建設に伴う調査によって、鋳型や溶解炉の破片をはじめ、鋳造に伴う鉄滓が多量に出土したことから、中世の鋳物師集団であった苅田鋳物師の工房や関連施設があった場所として注目されている[大阪市文化財協会2004・2009b]。苅田4丁目所在遺跡と本調査地間の距離は約800mあるが、既述した杉本町二丁目地区を含めて同様の鋳物師関係の遺物が出土することから今後それぞれの地点の調査が進めば中近世を中心に操業した鋳物師集団の系譜や動向も把握されるであろう。

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

大阪市住吉区浅香2丁目1に所在する浅香市営住宅は、低層の鉄筋コンクリート住宅であったが、築後約40年が経過し、老朽化が進んだため大阪市都市整備局では新しく高層の鉄筋コンクリート住宅に建て替えることになった。当地は旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である山之内遺跡の範囲内に当たるため、大阪市教育委員会文化財保護担当では建替え工事に先立って試掘調査を実施した。その結果、現地表面下約1.4mで鉄滓や焼土塊、中世の土器片などを含む地層をはじめ、遺構の一部を確認したため、本調査を行うことになった。

調査は平成20年11月10日から調査予定地内に残っていた旧建物基礎の撤去工事を行った後、残土置場を確保するため調査区を東西に二分して、平成21年1月6日から東区の現代盛土の重機掘削から着手した。次いで人力によって第1層以下の各層を掘削して調査を実施した(写真2)。この間、調査区を5mグリッドに区画して、遺物の取上げ時の基準とした(図6)。東区では当地域が市営住宅地として整地される以前の水田畦畔をはじめ、江戸時代末期～昭和初期にかけての遺物を含む作土層および

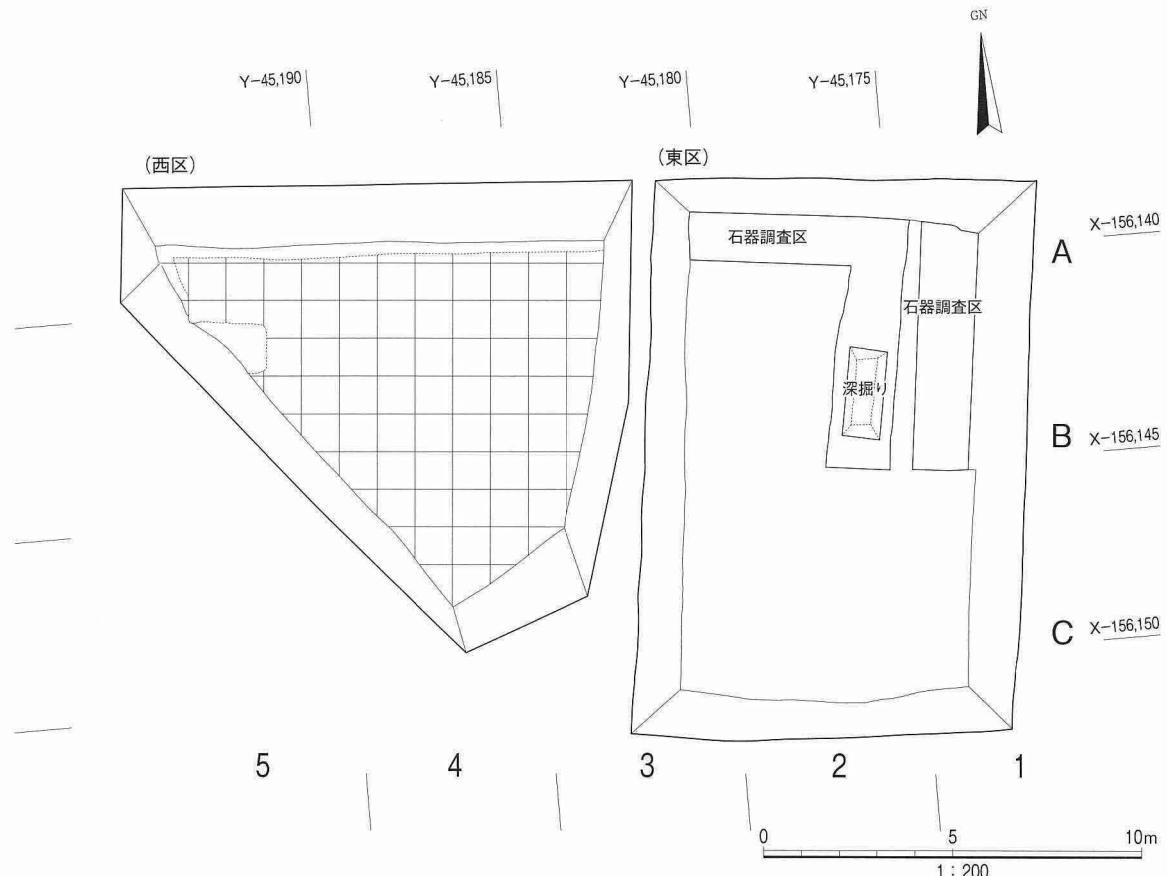


図6 調査区配置図および旧石器調査時のグリッドの配置図

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

鋤溝群、南北方向の溝が検出されたため、これらの遺構の調査を順次行った。また、当地域の段丘構成層についても東区の東部にトレーニングを設定して、各地層の堆積状況を観察するとともに第5層を対象とした旧石器の確認調査を実施した。東区の調査では第1～3層で検出した遺構や地層断面の写真撮影および実測などの記録作業を順次行ったが、平成21年1月27日には株式会社かんこうによる基準点測量を実施した。

平成21年1月26日から東区の埋戻しを行った後、引き続き西区の発掘調査に着手した。西区も東区同様に現代盛土を重機で除去した後、各地層の調査を行った。平成21年2月13日から第5層を対象にした旧石器の確認調査を実施した。この調査は東区はトレーニングを設定して行ったが、西区については図6に示したように1m×1mの小区画を設けて実施した(図6、写真3)。2月23日には西区の主要な調査を終えて、翌日から埋戻しに着手し、3月31日には調査地の整地をはじめ、調査器材の撤収を含めて現地におけるすべての調査を完了した。

報告書の作成に当っては、図面の整理や製図、遺物の洗浄・接合・実測作業を進めるとともに、金属加工関連遺物などについては別途X線透過撮影により実測を行った。



写真2 東区調査状況(西北から)



写真3 西区旧石器調査状況(南から)

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序

調査地の現地表の標高はTP+11.9m前後で周辺の道路面より幾分高くなっている。調査は東西に二分して実施したが、東西地区とも基本的な層序は以下のようになる(図7、表1)。以下東・西区の基本的な層序について記述する(図7~9)。

第0層は基本的には現代の擾乱層であったが、東区の中央部以南では旧市営住宅建設時の整地層である第0a・第0b層に二分された。

第0a層：真砂土およびオリーブ黄色(5Y6/4)小礫混りシルト質中粒砂からなる現代の盛土層で、層厚は20~50cmある。本層は旧市営住宅建設時の盛土層で、下部には第1層および第5層の偽礫を多く含む。上面の標高はTP+11.8m前後ある。

第0b層：本層は上部の灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂質小礫層と、下部の第5層の偽礫を多量に含む浅い黄色(2.5Y7/3)細粒砂質シルト層に二分される盛土層である。層厚は前者が20~40cm、後者は70cm前後ある。本層は戦後間もない頃の整地層である。東区の南部では一部ではあるが本層の上部に道路敷き様の厚さ約20cmの灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂質小礫層が見られた。

第1層：オリーブ黒色(5Y2/3)小礫混り粘土質シルト～極細粒砂質シルト層で、層厚は10~20cmある。本層は戦前の作土層で、上面の標高はTP+10.5~10.7mある。東区の本層の上面では上幅20~60cm、高さ20~30cmの畦畔を、下面で主に南北方向の鋤溝群を検出した。また、東区の南壁際では本層の基底面で、深さ約50cmの土壌SK102を検出した。

本層では19~20世紀にかけての陶磁器、「堺下源」の刻印のある軒平瓦、石製品・鉄滓・煙管の吸口をはじめ、裁断された牛の頭骨などが出土した。

第2層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)小礫混り極細粒砂質シルト層からなる作土層である。本層の層厚は10~20cm前後あり、東区の南部以外は上層の耕作で攪拌されて残りは悪い。土師器・須恵器・瓦器・中国青磁・肥前磁器、中世および近世の瓦・土錘・鉄滓・炉壁片など多岐に渡る遺物を含むが大半が細片であった。西区の本層の基底面では鋤溝SD207・224・226をはじめ、調査区のほぼ全域の本層の下面から幅、深さともに約15cm前後の鋤溝群を検出した。本層上面の標高は

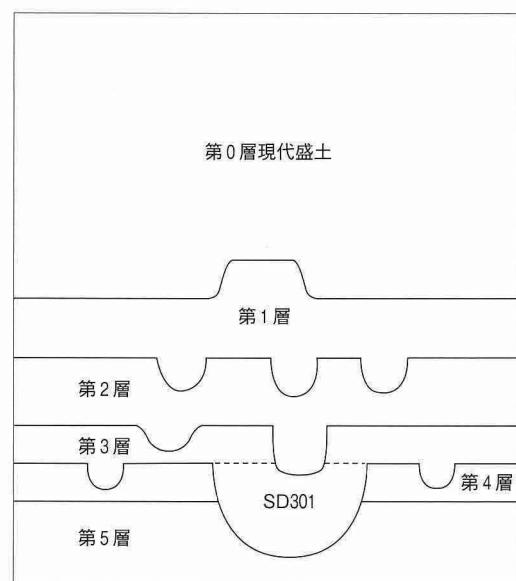
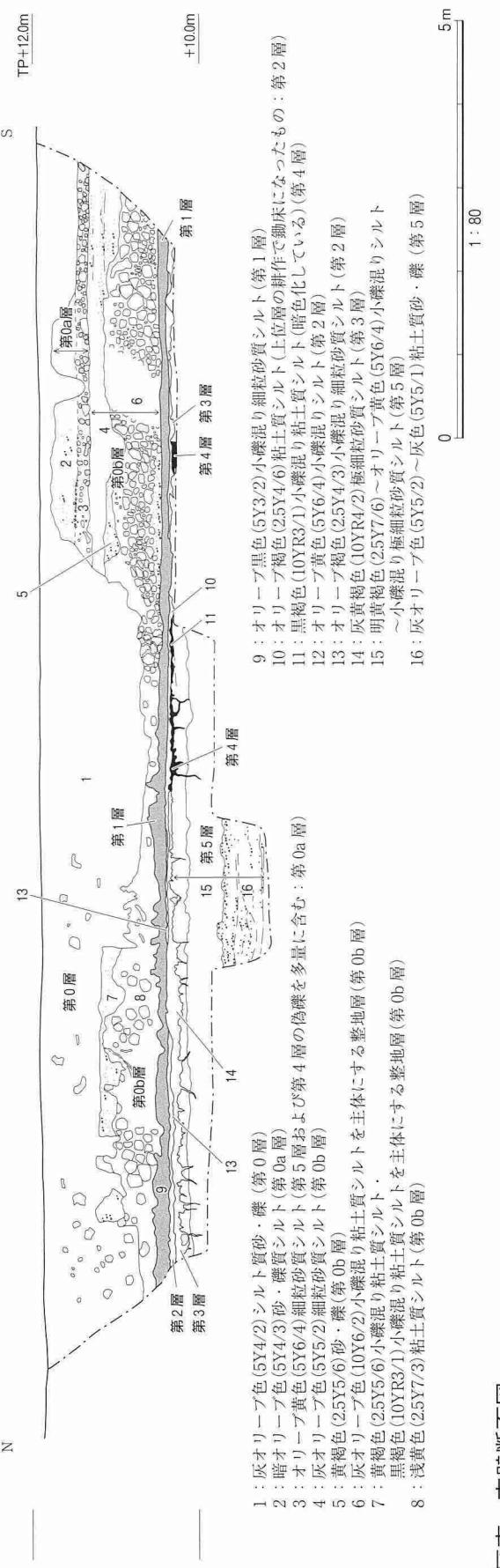


図7 地層と遺構の関係図

図面断壁東区東



西区東・南壁断面図

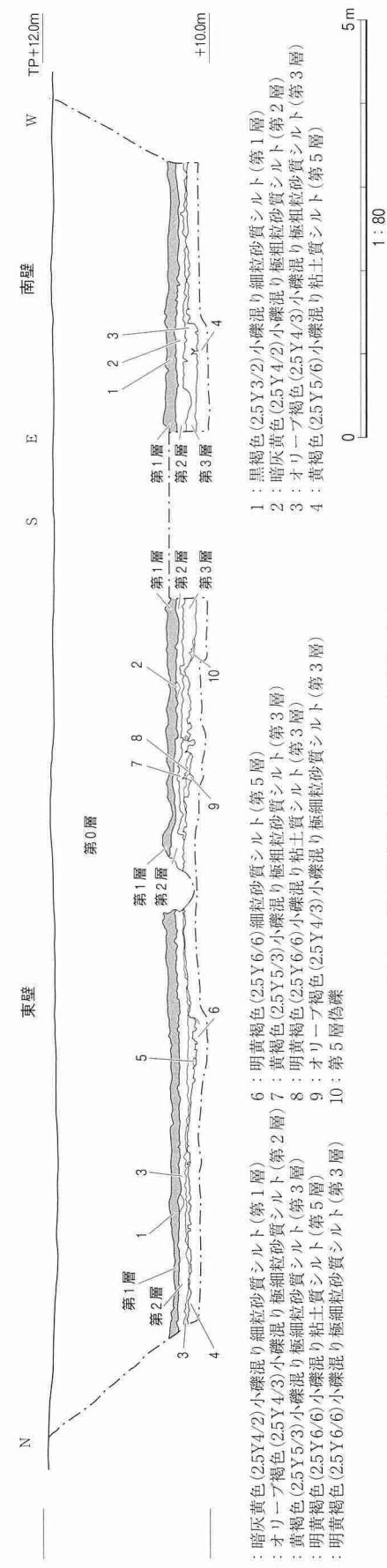
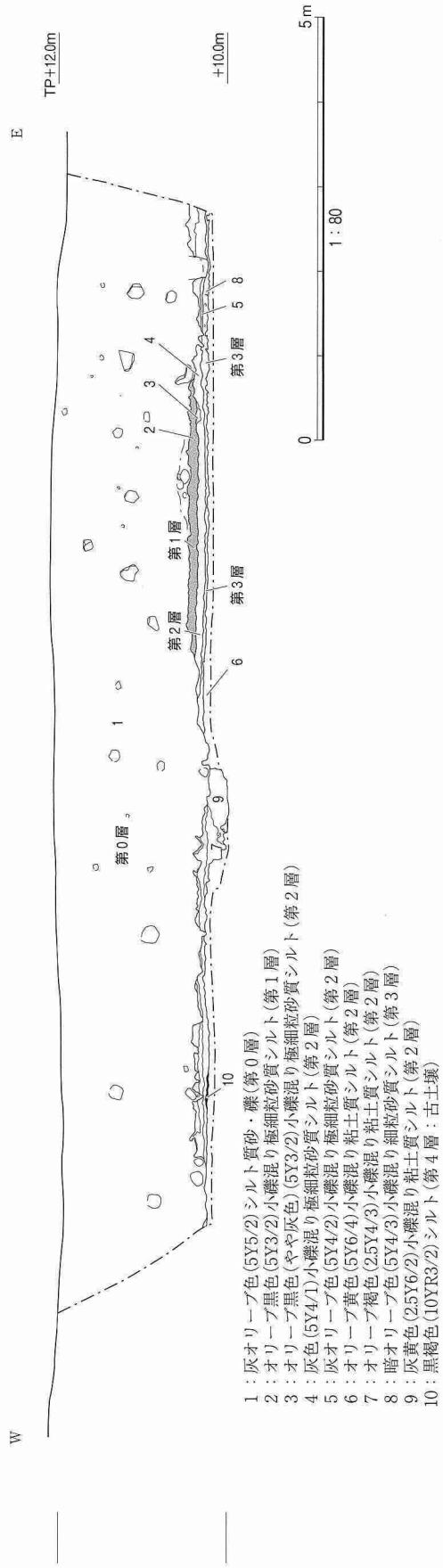


図8 東区東壁および西区東・南壁断面図

西区北壁断面図



西区西壁断面図

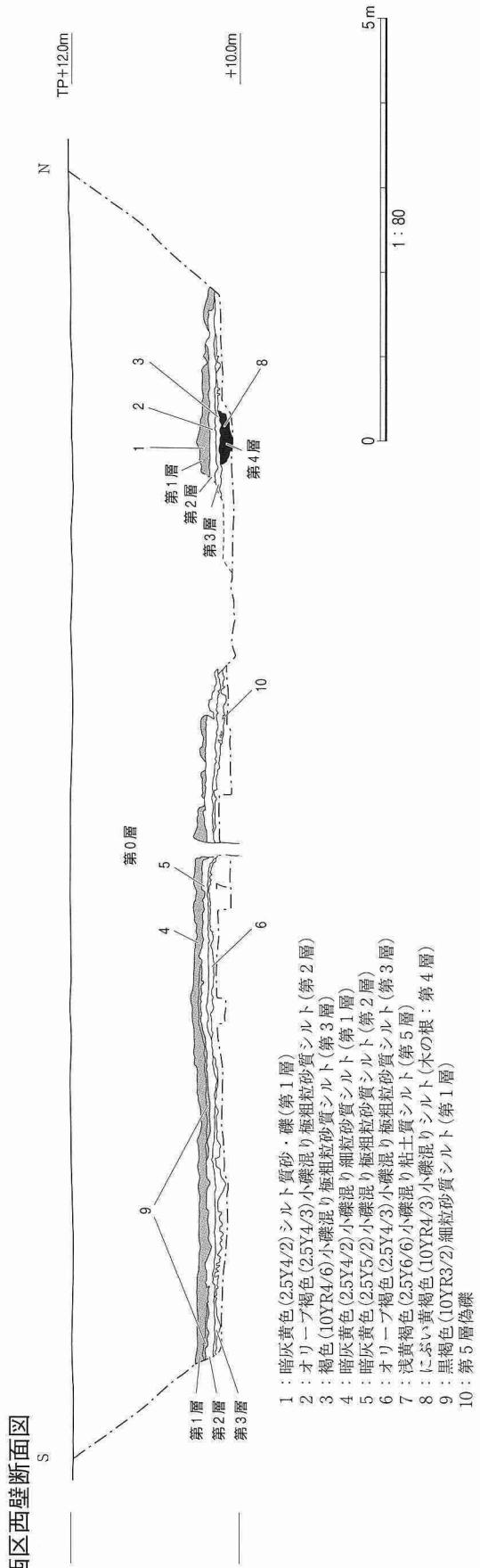


図 9 西区北壁・西壁断面図

第Ⅲ章 調査の結果

TP+10.4m前後ある。

第3層：灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルト層からなる作土層である。本層の層厚は10cm前後あるが、東区の中央部以南については上層の耕作によって攪拌されており、残りが悪い。本層の下面では多くの鋤溝が確認されたほか、東区では南北方向の溝SD301・302を検出した。サヌカイト剥片、6世紀後半～8世紀にかけての須恵器・土師器、14世紀の瓦器、15世紀の瓦質土器をはじめ、18～19世紀の陶磁器、瓦の細片が出土した。本層の時期は江戸時代末期と考えられる。

第4層：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルト層からなる暗色帶構成層で、東区の東北部から西南部にかけて分布していた。本層の層厚は5～10cmある。遺物は出土しなかつたが、調査地域のこれまでの層序からみて弥生時代以前の古土壤であろう。

第5層：明黄褐色(2.5Y7/6)細粒砂混り粘土質シルト層で、当地域の低位段丘を構成する地層である。本層上面の標高はTP+10.3～10.4mあり、南から北に向かってわずかに傾斜している。東区の中央部で行った深掘りトレーナーでは、本層の岩相が細粒砂混り粘土質シルト層の下が、灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質細粒～粗粒砂、砂・礫層に下方へ粗粒化していた。

表1 層序表

	層序	岩相	土色	層厚(cm)	遺構	おもな遺物	時代	対比
沖積層	第0層	(現代の攪乱層)	-	70～100				
	第0a層	真砂土・オリーブ黄色 小礫混りシルト質中粒砂 下半部に第1層および第5層の偽礫を多く含む <盛土層>	5Y6/4	20～50				YM1層
	第0b層	上部：灰オリーブ色 細粒砂質小礫 <整地層> 東区南部：灰オリーブ色 細粒砂質小礫層(厚さ約20cm)分布	5Y5/2	20～40			現代	
		下部：浅い黄色 細粒砂質シルト <整地層> 第5層の偽礫を多く含む	2.5Y7/3	ab.70	SR101			
	第1層	オリーブ黒色 小礫混り粘土質シルト～極細粒砂質シルト <作土層>	5Y2/3	10～20	↓ 鋤溝群 ▼SK102			
	第2層	オリーブ褐色 小礫混り極細粒砂質シルト <作土層>	2.5Y4/3	10～20	△SK213 ↓ 鋤溝群・SD201・足跡		近代	
	第3層	灰黄褐色 極細粒砂質シルト <作土層>	10YR4/2	ab.10	↓ 鋤溝群 ▼SD301・302・SK303	陶磁器 ・瓦	江戸 (末期)	YM1層
低位段丘構成層	第4層	暗灰黄色 極細粒砂質シルト 東区東北部～西南部に分布 <古土壤>	2.5Y4/2	5～10	-	-	弥生 以前	YM4層
	第5層	上部：明黄褐色 細粒砂混り粘土質シルト <河成層>	2.5Y7/6	≥120	-	-	旧石器 以前	(YM7層 or 8層 以下?)
		中部：灰オリーブ色 粘土質細粒～粗砂 <河成層>	5Y4/2					
		下部：灰色 砂・礫 <河成層>	5Y5/1					

←上面検出遺構 ↓下面検出遺構 △地層内の遺構 ▼基底面の遺構

第2節 江戸時代の遺構と遺物

第3層の下面では江戸時代末期頃の耕作に係る鋤溝群をはじめ溝SD301・302、土壌SK303を検出した。これらの遺構のうち、鋤溝群の多くは東区のSD301より西側で確認されたが、第2層準の耕作により攪乱されて残りは悪かった。以下に主な第3層下面検出遺構について記述する。

鋤溝群 調査地のほぼ全域に分布する鋤溝群で、その方向は図11に示すように調査地の東部にある溝SD301を境に東西および南北に変わる。これは耕作地一筆の区画の方針を示す可能性が高い。東西方向の鋤溝は幅0.1~0.2m、深さ0.1m前後ある。鋤溝の間隔は0.2~0.5m前後あり、最長約15mに渡って確認されたが、溝が交差する場所は見られなかった。埋土は第3層と基本的には変わらないが、わずかに酸化第2鉄を多く含む。なお、調査地の北西部にやや密集して見られる鋤溝群は、第3層下部の酸化第2鉄を多量に含む褐色(10YR4/4)小礫混り細粒砂質シルト層をすべて除去した過程で確認されたので、周りの鋤溝群よりわずかに先行するものであろう。

一方、SD301の東側で確認された鋤溝群は南北方向で、SD301に沿うようにわずかに弧を描くものであった。鋤溝の幅は0.15~0.20mで、深さは0.15m前後あり、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)小礫混り細粒砂質シルトで酸化第2鉄を多く含む。18世紀後半~19世紀に属する肥前陶磁器や瓦の細片が出土した。

以上の鋤溝群は近くに水路とみられるSD302が位置することを考慮すると、水田耕作に伴うものであり、それが形成された時期は第3層の出土遺物からみて近世~近代頃と考えられる。

SD301 東区の東部に位置する幅約1.7mの南北方向の溝で、深さは検出面から0.2~0.3mあり、底面には掘削痕跡および第5層の偽礫からなる極薄い加工時形成層が見られた(図10・11)。

基本的な埋土は上部層が暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルト、第5層の偽礫を多く含む灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルトで、下部層は暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂質シルトに二分される。上・下部層ともに埋め戻された埋土ではあるが、溝内の掘削時に加工時形成層上で部分的に確認された極細粒砂やシルト質極細粒砂の薄い層を考慮すると溝内には當時水は流れていなかった可能性が高い。上部層から炉壁および瓦器碗の細片が出土した。

SD302 東区のSD301の東側約2mに位置する幅0.5m、深さ0.2m前後の南北方向の溝である。埋土は水付きの黄灰色

(2.5Y6/1) 小礫混り粘土質シルトで水路であろう。遺物は出土しなかったが、溝の時期は層相からみてSD301とさほど変わらない時期と考えられる。また、SD301およびSD302間の

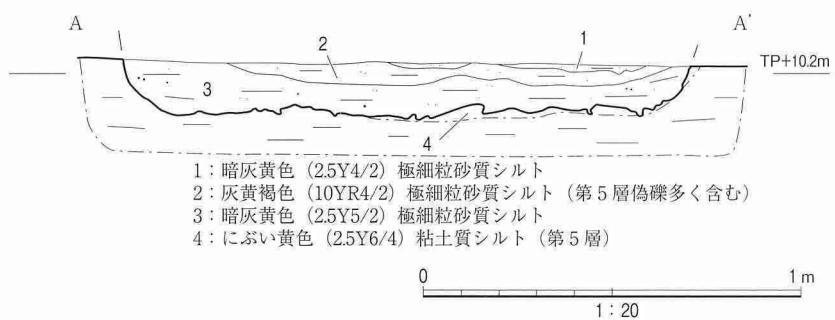


図10 SD301断面図

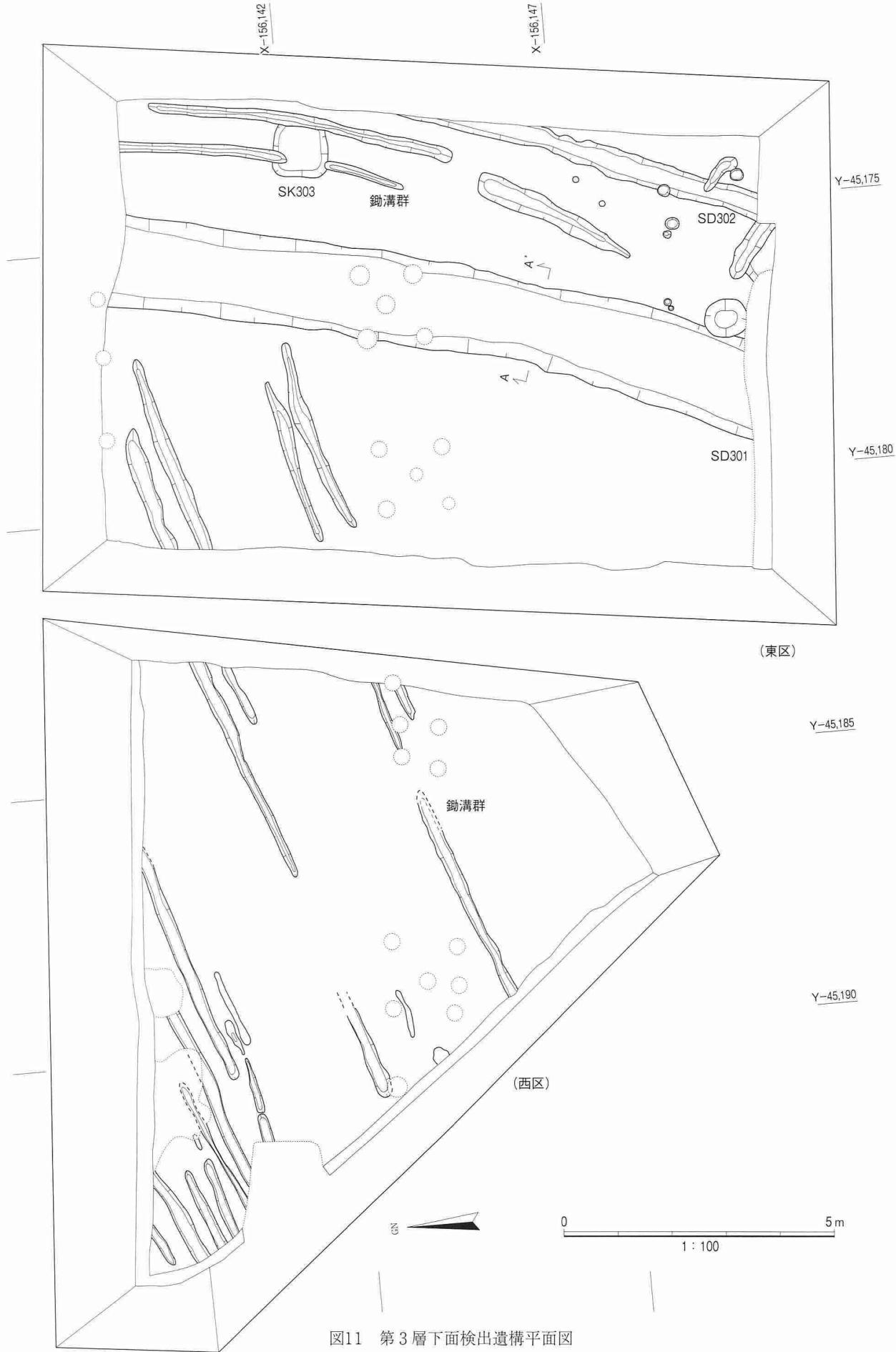


図11 第3層下面検出遺構平面図

鋤溝の方向は、SD301を境に東西から南北方向に変わる。これは耕作地の地割がSD301を境に変わることを示唆している。

SK303 東区の東部に位置する一辺約1m、深さ0.1~0.2mの方形土壙である。埋土は第3層の作土に類似した黄褐色(2.5Y5/3)小礫混り極細粒砂質シルトで、遺物は何も出土しなかった。遺構の上部を南北方向の鋤溝に切られているが、埋土からみて、双方の時期差はさほどないものと思われる。

第3節 近代～現代の遺構と遺物

1) 第2層下面検出遺構

SD201 西区の北部に位置する幅0.7～1.0m、深さ0.2m前後の溝で、底は平坦な面をなし、偶蹄類の足跡群が見られた。溝の底は中程以東が一段深くなっている、ここにも多数の偶蹄類の足跡があった。埋土は第2層の作土とよく似た灰オリーブ色(5Y4/2)小礫混り細粒砂質シルト層で、土師器・瓦器・炉壁・輔羽口などが出土したがいずれも細片であり、図化しうるものはなかった。なお、本溝の底面で確認された偶蹄類の足跡と同様なものは、西区のSD226の東側およびSK213の西側にもあった。いずれも周囲の鋤溝と同一方向で幅0.8～0.9mの範囲にあった。一見ぬかるみ状を呈していることから元は耕作に伴う幅1m前後の溝であった可能性がある。

鋤溝群 東西両区で第2層の下面から多数の鋤溝を検出した。鋤溝の多くは幅および深さともに0.15m前後あり、埋土は鉄分を多く含む灰オリーブ色(5Y4/2)小礫混り細粒砂質シルトであった。各鋤溝からは土師器・瓦質土器・炉壁・輔羽口などの細片が出土したが図化しえたものは少ない。ここでは西区のSD207、SD224、SD226から出土した遺物を報告する(図12)。1は長さ3.8cm、厚さ3.0cmの炉壁のつなぎの破片である。色調は灰白色で、内面はガラス状に溶解している。2も炉壁のつなぎの細片である。色調は外面が灰白色、内面は黒褐色を呈し、ガラス状に溶解している。所属時期は断定しがたいが、中世～近世初期に属するものであろう。3は口径約26cmの瓦質土器擂鉢である。体部外面の調整は横方向のヘラケズリで、同内面には粗い擂り目がある。色調は灰白色で、焼成はあまり。

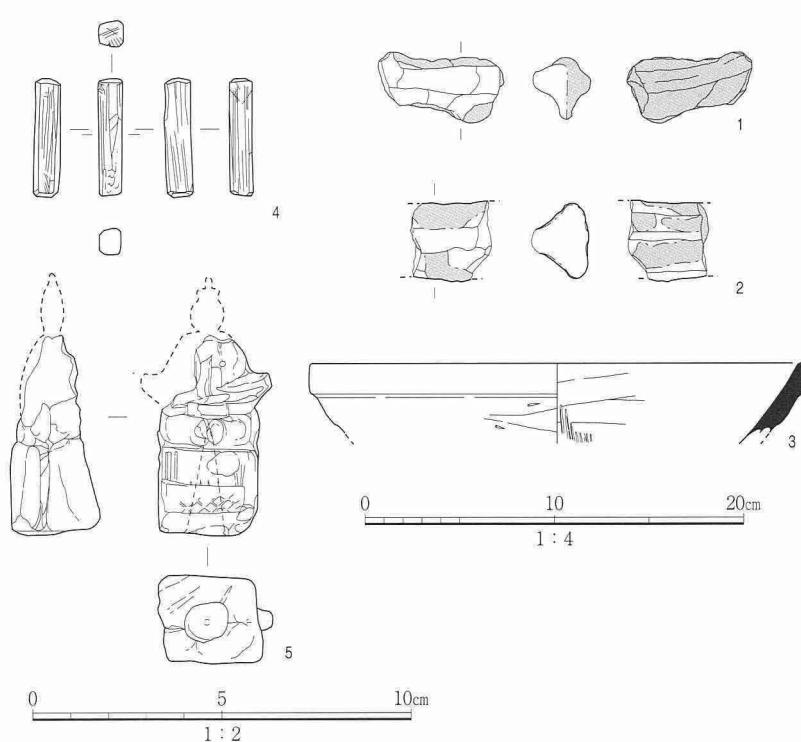


図12 鋤溝群出土遺物実測図
SD207(1)、SD224(2・3)、SD226(4・5)

15世紀後半に属するものと思われる。4は長さ3.10cm、厚さ0.65cmの黄褐色を呈する石製品である。上端は丸く摩耗しており、下端は平坦で石墨とみられるものである。5は残存高5.2cm、最大幅3.0cm、最大厚2.3cmの土人形の天神である。色調は浅黄橙色で焼成は良い。19世紀頃に属するものであろう。

SK213 西区の南部に位置する東西1.2m、南北1.5m以上の土壙で、全体の形状や規模については明らかで

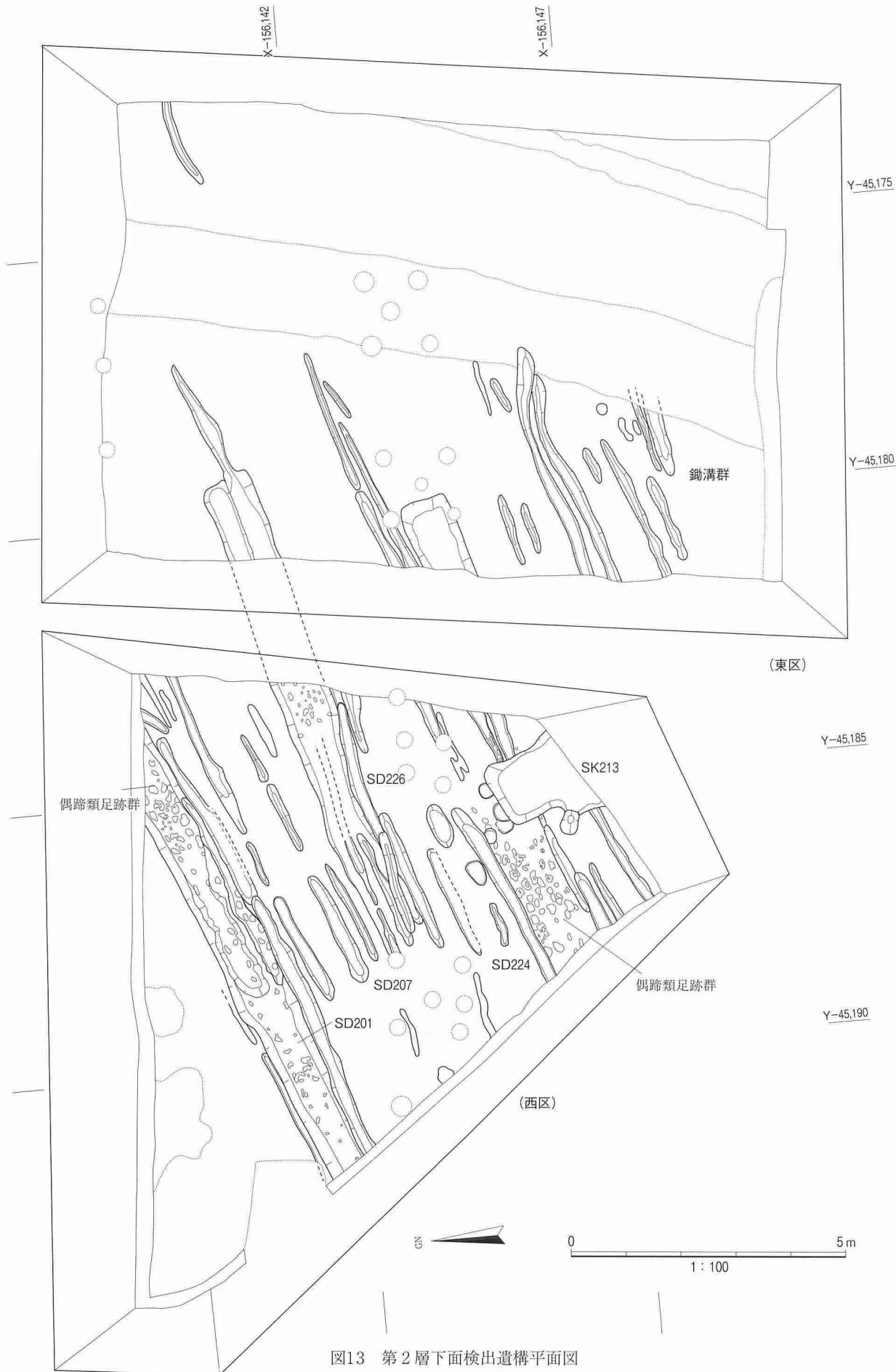


図13 第2層下面検出遺構平面図

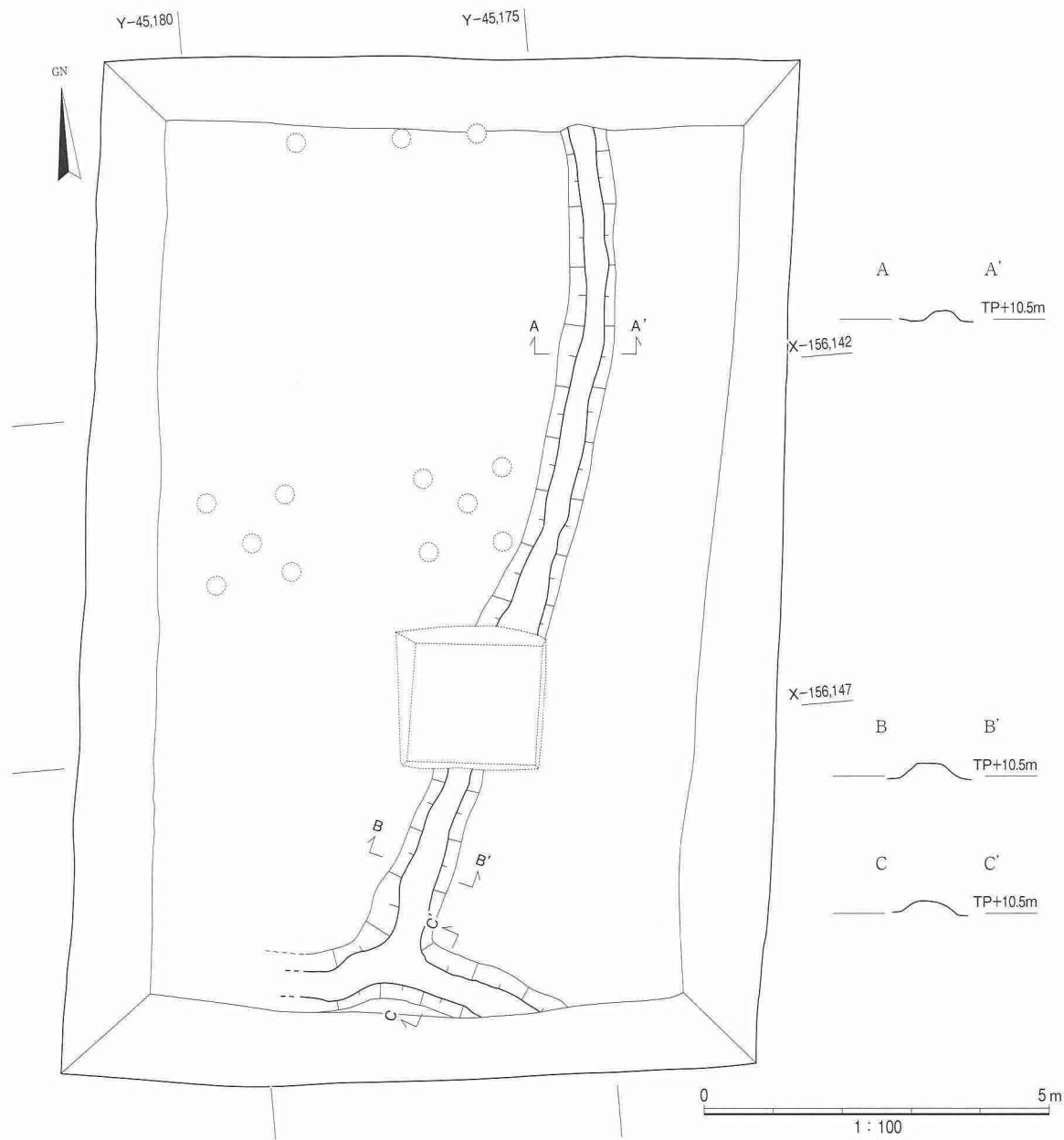


図14 東区第1層上面検出SR101平面・断面図

ない(図13)。内底面は平坦な面をなし、埋土は第2層の作土と同様の灰オリーブ色(5Y4/2)小礫混り細粒砂質シルトである。瓦・炉壁の細片が出土した。

2) 第1層上面検出遺構

SR101 東区の第1層上面で検出した上幅0.2~0.6m、下幅0.7~0.9m、高さ0.2~0.3mの断面が台形の畦畔である。畦畔はやや湾曲するが南北に延びており、東区の南部ではY字状に分岐している(図14)。西区に向かって延びる畦畔は途中で攪乱され途切れていた。なお、本畦畔の方向は下層のSD301の方針に近いことから江戸時代以来の耕作地の区画を近代以降も踏襲している可能性が高い。西区では畦畔は見られなかった。本畦畔は古代の水田畦畔の規模や形状に類似していたが、これは近代になっても水田を区画する畦畔の機能や構造は基本的に古代と変わらなかったことを示している。

第4節 各層出土の遺物

ここでは第1～3層から出土した各種の遺物(図15～17)について順を追って報告するが、金属器については節末に一括してまとめた(図18)。

a：第1層出土の遺物

6・7は西区から出土した同一個体とみられる須恵器壺か甕の底部の破片である。ともに外側には平行タタキが施されており、内面には当具痕がある。8は口径14.4cm、器高3.1cmの瀬戸美濃焼磁器輪花皿で、色調は乳白色を呈している。口縁部の内面には菊と流水が、内底面には「水花千山色 忠情逆性怯」とみられる詩が記されている。木堂は1932(昭和7年)に亡くなっている犬養毅の号と思われる(註)。9は器高9.5cmで、色調が乳白色を呈するガラスの化粧瓶である。器体は八角形を呈し、底部は浅く凹み、アラビア数字の2が見られる。以上の遺物の年代であるが、6・7は7～8世紀代、8・9は昭和初期に属するものであろう。

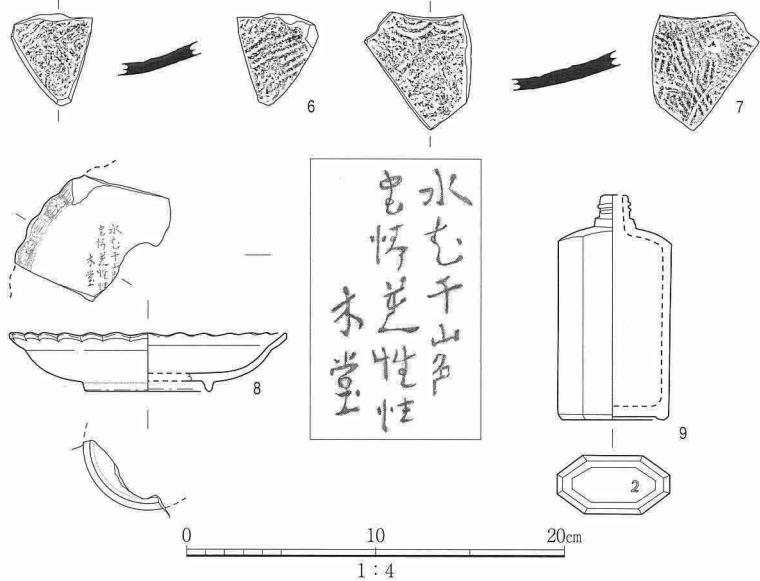


図15 第1層出土遺物実測図

西区第1層(6・7)、第1c層整地層(8・9)

b：第2層出土の遺物

10は高台径が5.8cmの関西系陶器鉢で、内底面にモミジの染付がある。色調は内外面とも灰白色を呈する。11は口径5.6cmの関西系陶器蓋で、色調は外面が灰白色を呈し、内面はにぶい黄橙色である。12は関西系陶器鉢の口縁部の細片で、色調は内外面ともにぶい黄色である。13は口径8.2cmの備前焼の蓋付きの鉢である。体部の上端にカキメがある。色調はにぶい赤褐色で、焼成は良い。14は口径約23cmの須恵器甕で、口縁端部は丸く肥厚している。色調は内外面とも灰色で、焼成はあまり。15は東播系須恵器鉢の口縁部の細片である。色調は灰白色で、焼成はややあまり。16は肥前焼器蓋で、外面に2条の圈線と草花を、内面中央にも圈線と草花様の文様がある。17は瀬戸美濃焼磁器で、内面にコバルト色の銅板刷りのレンガ積建物や樹木がある。低い断面三角形の高台の径は約8cmある。18は瀬戸美濃焼磁器染付皿で、高台径は6.7cmある。内面中央の「麗」とみられる字の周囲に網目と虫を染付ける。19・20は丹波焼擂鉢の口縁部片である。20の口縁部外端面にはにぶい沈線が2条巡る。21は口径10.8cmの瀬戸美濃焼磁器皿で、器体の内面には花文がある。22は瀬戸美濃焼磁器碗で、内外面にコバルト色の銅板刷りによる草花文が見られる。23は肥前焼器合子で、口縁端部を欠損しているが、色調は内外面とも灰白色を呈する。24は肥前焼器碗の底部で、高台基部に1条の圈線がある。色調は明

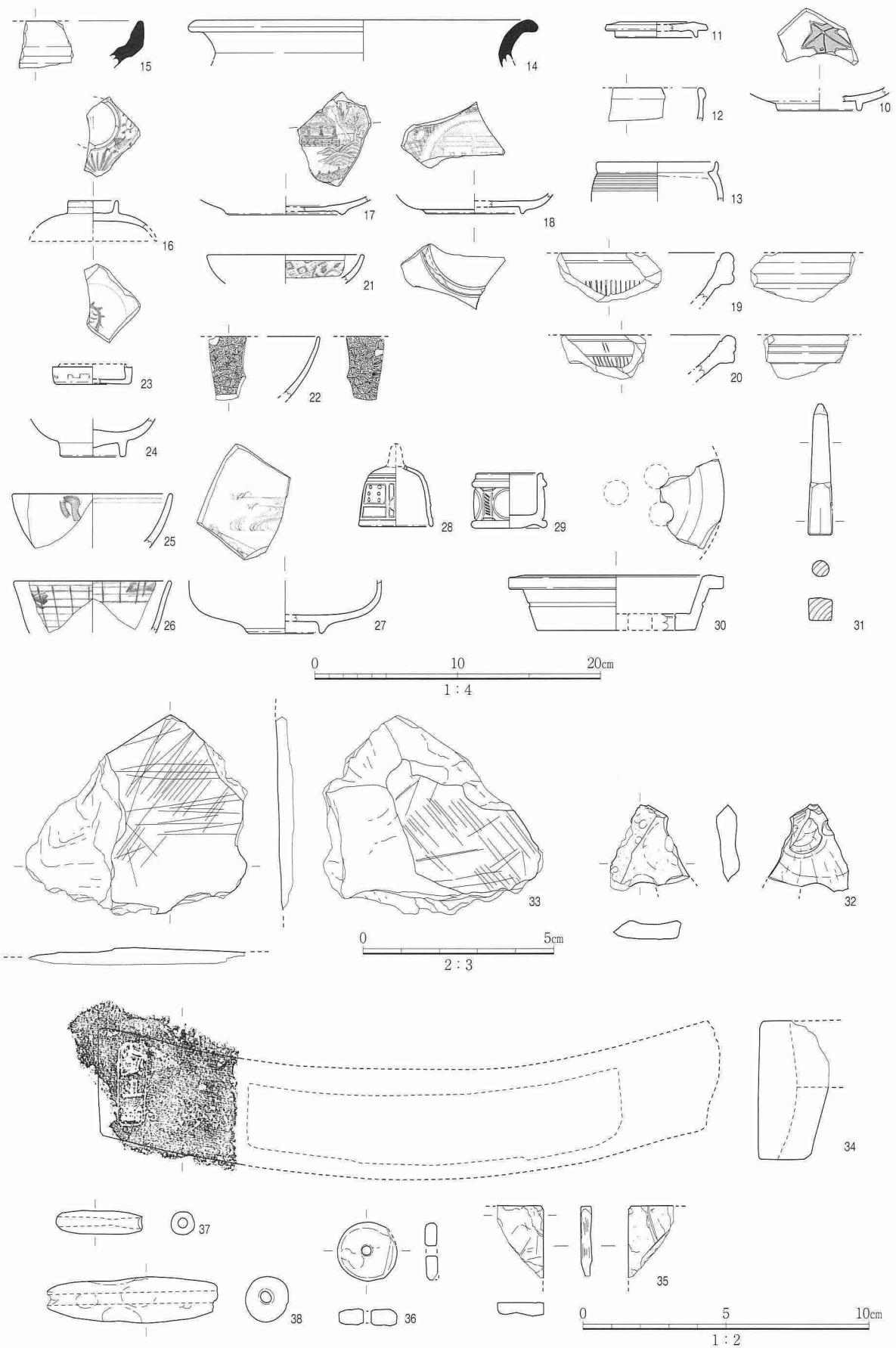


図16 第2層出土遺物実測図

東区第2層(10~38)

緑灰色を呈する。25は口径11.0cmの肥前磁器碗である。口縁部の内面に2条の圈線が巡り、外面にも草花状の文様がある。26は口径10.8cmの肥前磁器碗で、器体の内外面には格子に草花文がある。27は高台径約5.0cmの肥前磁器青磁染付鉢である。色調は外面が緑灰色で、内面は青灰色を呈し、内面には水流と船を引く人物を描く。28は珉平焼風鈴で、色調は内外面とも水色である。29はガラス製の化粧品の容器で、色調は内外面とも乳白色を呈する。30は焜炉のサナで、底部に径1.6cmの円孔を穿つ。色調は灰白色で、内面は浅い黄橙色を呈する。31は樽の栓で、長さは9.2cmある。樹種はヒノキである。32はサヌカイト剥片で、最大長2.3cm、最大幅2.1cm、最大厚0.5cmある。下端が折れているほか、表裏面とも一部に自然面が残る。33は最大長5.3cm、最大幅5.8cm、最大厚0.5cmの頁岩製の砥石の破片である。表面には磨傷が残る。34は軒平瓦の端部片である。「堺下源」の刻印が見られる。35は砥石の破片とみられるものである。36は直径2.1cm、厚さ0.6cmの円板状土製品で、中央に径0.4cmの円孔を穿つ。色調は橙色で、焼成はあまり。37は長さ3.0cm、幅0.8cm、紐孔径0.3~0.4cmの管状土錘である。重さは1.9gあり、管状土錘の中では比較的軽いものである。色調はにぶい橙色で、焼成は良い。38は長さ7.0cm、幅1.6cm、紐孔径0.4~0.5cmの管状土錘で、重さは14.0gある。色調はにぶい橙色で、焼成は良い。

以上の遺物のうち、32は弥生時代中期の可能性が高く、14は8~9世紀、15は14世紀代、10~13・16・18~21・23~26・30・34は19世紀の終わり頃、17・22・28~30は昭和初期に属するものと考えられる。

c：第3層出土の遺物

39は備前焼の花入で、上端近くに1条のにぶい沈線が巡る。色調は赤褐色で、焼成は良い。40は口径約18cmの瓦質土器鉢で、口縁部を玉縁状におさめている。色調は暗赤灰色を呈する。41は土師器甕の細片で、調整は内面が左上りのハケ調整、外面は器面が風化しており明らかでない。色調は黄橙色を呈する。42は須恵器甕とみられる体部の細片で、表面を平行タタキで整形しており、内面には当具痕がある。43は口径約10cmの肥前陶器碗で、外面には雨降り文が見られる。44は底径5.2cmの肥前陶器碗である。色調は露胎が淡黄色で、器体に灰白色の釉をかける。45は口径約7cmの瀬戸美濃焼陶器の小杯で、色調は暗赤褐色を呈する。46は関西系陶器鉢の口縁部片で、端部を玉縁状におさめている。外面にオリーブ黄色の釉がかかる。47は口径23.5cmの備前焼擂鉢である。直立する口縁部の内外面に強いヨコナデ調整を加えている。内面の摺目は粗く間隔が広い。色調は灰白色で、焼成は良好である。48は鋳造炉の炉壁のつなぎ目で、色調は外面が灰色を呈するが、ガラス状に溶解している内面は暗オリーブ灰色である。49は鞴の羽口の細片で、器体の色調は赤褐色で、先端はガラス質に溶解している。50も鞴の羽口の細片で、器体の色調は赤色で、先端はガラス質に溶解している。51は口縁部および底部を欠損した瓦器ミニチュア釜である。色調は暗灰色で焼成はややあまり。52は口縁部が緩やかに外反し、端部を丸くおさめた瓦質土器甕の細片である。体部の外面を平行タタキで整形している。色調は灰~灰白色で、焼成は良好である。53は瀬戸美濃焼陶器碗で、高台径は5.6cmある。体部の外面をヨコナデ調整しており、色調は外面が灰白色で、内面は浅い黄色を呈する。54はサヌカイト製の石核で、最大長4.30cm、最大幅6.00cm、最大厚2.65cmある。表裏面とも上部に剥片を剥ぎ取った

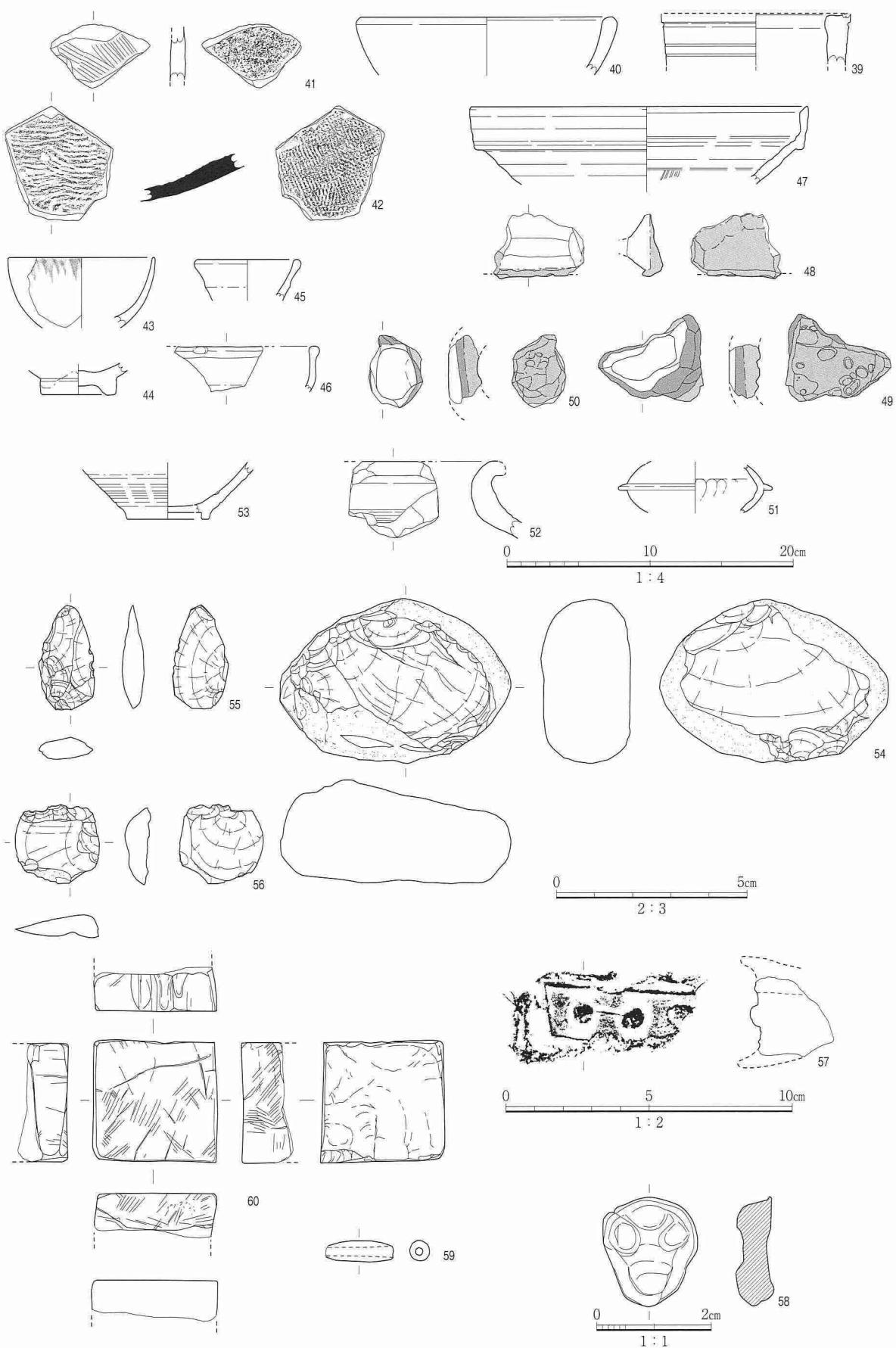


図17 第3層出土遺物実測図

東区第3層(40・43~45・51・52)、西区第3層(39・41・42・46~50・53~55)

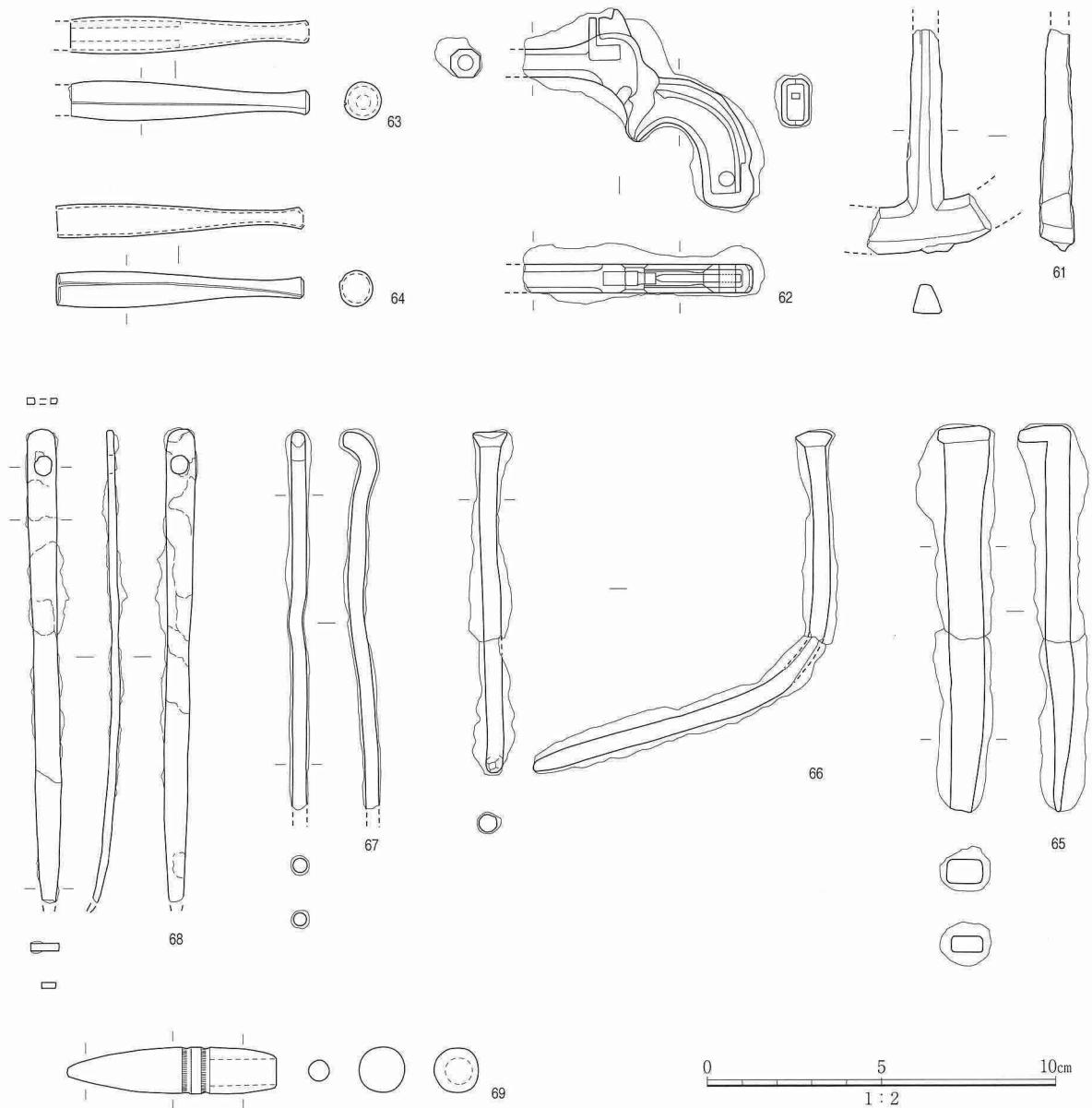


図18 第2・3層出土遺物実測図
東区第2層(61~64・67・68)、東区第3層(65・66)、西区第3層(69)

際の打点がある。表裏面に自然面が残っており、転石を石核素材として使ったものであろう。55は最大長2.80cm、最大幅1.45cm、最大厚0.55cmのサヌカイト製の細部調整剥片である。56は最大長2.1cm、最大幅2.2cm、最大厚0.6cmのサヌカイト製の細部調整剥片で、主要剥離面側の上端に打点がある。裏面側にも細部調整を加えているが、一部に自然面が残っている。57は軒平瓦で、瓦当面の上下端を欠損しているが、圈線の中に大粒の朱文を配している。色調は暗灰色を呈する。58はサルの顔を模した土人形である。長さ1.85cm、幅1.65cm、厚さ0.65cmで、色調は橙色を呈する。59は長さ2.35cm、幅0.70cmの小型の管状土錐で、重さは1.2gある。色調は褐灰色を呈する。60は一辺約4cmの頁岩製の砥石の破片である。小口端面を含めて各面に研磨痕が見られる。

71~79は鋳造炉の炉壁片で、炉内に当る側はガラス質に溶解している。色調は内面が灰白~黒灰色、外面は赤褐色を呈している。これらの大きさは3.5cm~6.5cm大である。

第Ⅲ章 調査の結果

以上の遺物の所属時期であるが、42は7～8世紀代、57は14世紀代、41・51・52は15世紀代、47は16世紀初頭、44・53は17世紀代、39・40・43・45・46・58～60は19世紀末頃に属するものであろう。48～50・71～79などの铸造関係の遺物の年代は15～16世紀初頭頃に属する可能性が高い。また、石器遺物のうち、54～56は弥生時代中期に属するものと考えられる。

e：各層出土の金属製品

61～64・67・68は東区の第2層、65・66は東区第3層、69は西区第3層から出土した(図18)。

61は東区第2層から出土した鉄製五徳である。断面形は台形で铸造物である。62は玩具のピストルとみられるもので、銃身は八角形を呈する。63・64は煙管の吸口で、ともに薄い銅板を折り曲げて作製している。長さは前者が6.2cm、後者は7.0cmある。65は長さ約11cmの鉄釘で、断面形は長方形、頭部は直角に曲がる。鍛造品である。66は「く」の字に曲がった鉄釘で、頭部は逆台形状を呈し、断面形は円形である。67は直径0.55cm、長さ10.90cmの棒状鉄製品で、上端が曲がっている。68は長さ13.5cm以上、幅0.7cm、厚さ0.2cm前後の鉄製品で、頭部に径0.5cmの孔を穿つ。頭部から下端に向かって身幅が狭くなっている、先端近くで反っている。大型の針の可能性がある。69は米軍仕様の12.7mm機銃弾とみられるものである。第3層に突き刺された状態で出土したことから、第2次大戦時の航空機による機銃掃射の際の流れ弾の可能性がある。

以上の金属製品のうち、65・68以外は近・現代に属するものであろう。

(註)

詩の読みや「木堂」号については、茶道資料館の降矢哲男氏に御教示いただいた。

第IV章 調査成果のまとめ

以下に今回の調査で検出した遺構・遺物をはじめ地層観察の結果をもとにした調査成果について若干のまとめをしておきたい。

江戸時代以前

今回の調査では江戸時代の遺構を確認したほか、弥生時代中期の土器細片、サヌカイト製の石器遺物、古墳時代後期の須恵器、奈良時代の須恵器、室町時代の瓦器・土師器・鎔物関連遺物など、江戸時代以前の各時期の多岐に渡る遺物が出土した。これらの遺物は破片とはいえ山之内遺跡のこれまでの調査で明らかにされている歴史的な変遷過程を検討する際の基礎的な資料となった。中でも鎔造炉壁片、鎔造滓を含む鉄滓、轆羽口など鎔物に関わる遺物は、遺構は明らかにしえなかつたが、調査地の近辺に江戸時代以前に遡る鎔物師集団が居住していたことをつきとめる結果となった。今後、調査地域で当該期の鎔物関連遺構や遺物が発見される可能性が高まった意義は大きい。

一方、弥生時代中期や古墳時代後期に属する遺物も調査地域に当該期の遺構が存在することを示唆するものであり、その詳細については今後の調査に委ねたい。また、一部ではあるが第5層の上部で弥生時代以前に遡る可能性のある古土壤(第4層)を確認することができた。第5層は江戸時代以降の水田開発や耕作で攪拌されてはいたが、今回わずかであれ第4層を含めてプライマリーな状態で確認されたことは、近くから弥生時代中期および後期旧石器時代の遺構や遺物が確認される可能性が高くなつたといえる。

江戸時代以降

第1～3層で検出した耕作に関わる鋤溝や水田畦畔、用水路などは調査地域が江戸時代以降長らく水田や畠などの耕作地であったことを裏付けている。中でも第2層および第3層の下面で検出された用水路や鋤溝群は当地域が耕作地として開発された時期やその後の景観の移り変わりを明らかにするうえで基礎となる資料といえる(図19)。今回の調査では第3層で耕作がなされた時期は、作土から出土した遺物の年代からみて、江戸時代以降の可能性が高い。次いで第2層の水田は明治以降、第1層の畦畔を伴う水田の時期は現代、それも旧市営住宅が建設される昭和30年代まで耕作地として利用されていたことが判明した。さらに第2・3層の鋤溝群の方位の変化は耕作地の区画の方向が変化したことを見ているようであるが、一筆の大きさはさほど変わっていないことを確認した。第1層の畦畔を伴う水田も下層の用水路と畦畔の位置がほぼ重複していることを重視すると、耕作地一筆の面積は前の時代とさほど変わらなかったものと推定される。このような調査地域の景観の移り変わりは、1886・1887(明治19・20)年以降の地形図や終戦直後に米軍が撮影した航空写真などからも追認される。

次に第2層出土の「堺下源」瓦について若干の考察をしておきたい(図20)。「堺下源」の刻印(スタン

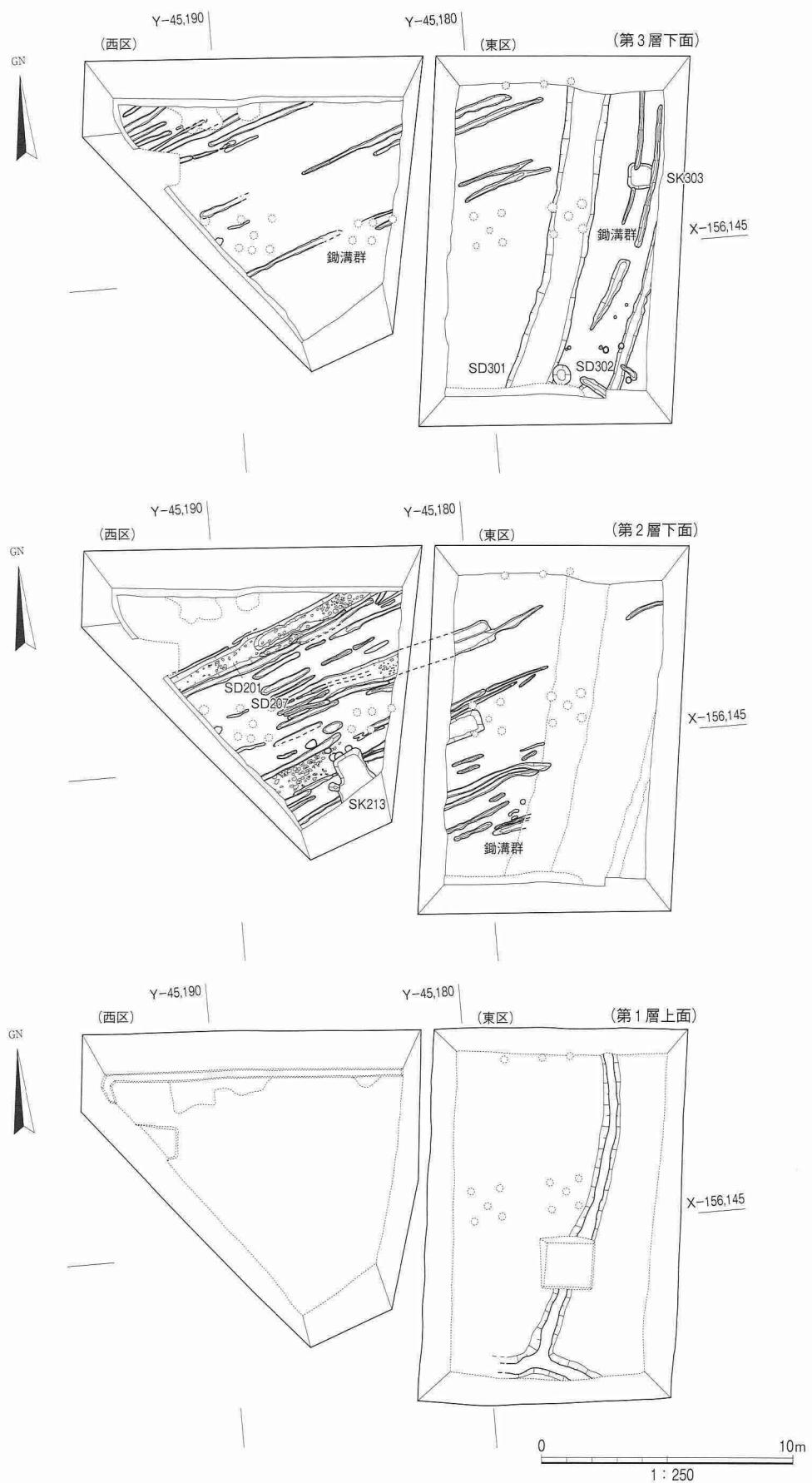


図19 調査地の変遷

ブ)が見られる軒平瓦片34の刻印は上下逆に押されており、源の字がやや崩れているように見える。近世の刻印瓦は一般に瓦屋の商標(ブランド)であり、刻印には生産地と瓦屋名が記されていることが多い。したがって「堺下源」の刻印は、刻印の頭が地名を現す「堺」、次いで「下源」という瓦屋名となっている。「堺下源」は「堺下田源兵衛」の簡略形の刻印であることが判明しており、同様な刻印はこれまでに堺市内では堺環濠都市遺跡[池峰龍彦1991・1994]をはじめ、北花田口遺跡[嶋谷和彦1990a]ほかで確認されている[嶋谷1999]。刻印瓦は大阪市内では住友銅吹所跡[大阪市文化財協会1998]・大坂城三の丸跡[藤井直正・藤本史子ほか1988]や四天王寺境内遺跡[中村浩ほか1997]などで出土しているという。『大坂瓦屋仲間記録』には「下田源兵衛」は1810(文化7)年、1821(文政4)年、1823(文政6)年に名前が記載されており、当時の堺の瓦株仲間の名義の変遷を辿る資料として注目されている[嶋谷1990b]。また、1798(寛政10)年の「瓦方名前切替帳」には「下田源兵衛」が「北瓦町」に居住していたことが記載されている。つまり、「下田源兵衛」は1823年ころまで堺環濠都市遺跡内の北瓦町に居を構え、瓦を生産していたことが知られるのである。山之内遺跡から北瓦町間の距離は比較的近いので、当地域は堺瓦の流通圏であったのであろう。

以上、簡単ではあるが本調査成果のまとめについて記述した。調査地周辺での本格的な調査はさほど多くなく、中世～近世初期の鋳物師関係の実態はもとより、当地域の歴史的な状況については明らかでない部分が多い。今後の課題としては調査地域の新たな発掘調査資料の蓄積と分析をするとともに、これまでに蓄積してきた調査成果の再検討を行なうことが肝要である。そうすれば調査地域を含めた山之内遺跡の後期旧石器時代以降、近現代に至る土地利用や景観の復原が可能となろう。上町台地南部およびその周辺に点在する諸遺跡と山之内遺跡の関係については、山之内遺跡のみならず周辺遺跡を含めた発掘調査成果に基づく総合的な研究が必要であり、今後の調査の進展に加え時機をみて再検討する所存である。

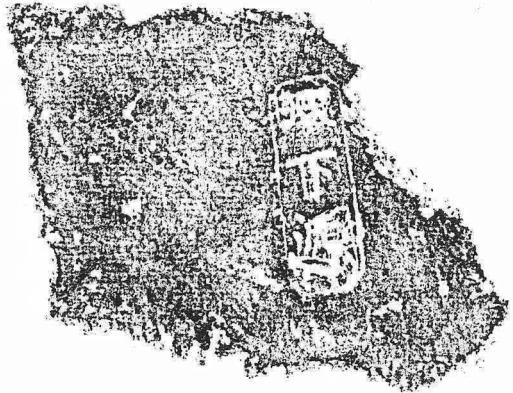


図20 「堺下源」刻印瓦拓本(S=1/1)

引　用・参　考　文　献

- 池峰龍彦1991、「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告－SKT294地点－」：『堺市文化財調査概要報告書第11冊』堺市教育委員会
1994、「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告－SKT286地点－」：『堺市文化財調査概要報告書第46冊』堺市教育委員会
今池遺跡調査会・堺市教育委員会1976、『今池遺跡－学校建設予定地内発掘調査報告－』
大阪市立大学考古学研究会1982、『史峯－遠里小野・山之内遺跡の研究－』第6号
大阪市文化財協会1988、『中野甚一氏による建築工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM88-41)略報』
1996、『森の宮遺跡』II
1998a、『山之内遺跡発掘調査報告』
1998b、『桑津遺跡発掘調査報告』
1998c、『南住吉遺跡発掘調査報告』
1999、『山之内遺跡発掘調査報告』II
2006、『遠里小野遺跡発掘調査報告』I
2008、『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』II
2009a、『遠里小野遺跡発掘調査報告』III
2009b、『苅田9丁目所在遺跡発掘調査報告』
大阪府文化財センター2008、『難波大道の調査』：都市計画道路大和川線建設に伴う大和川今池遺跡発掘調査現地説明会資料
小山正忠・竹原秀雄1996、『新版 標準土色帳』17版 日本色研事業株式会社
堺市教育委員会1997、「浅香山遺跡発掘調査概要報告－堺市今池町3丁 ASK-1地点－」：『堺市文化財調査概要報告』第
63冊、pp.27-30
三宮昌弘2009、「大和川今池遺跡の発掘成果とその意義」：『シンポジウム畿内の都城と大道－難波大道の発掘は何を語
るか－資料』、大阪市文化財協会・大阪府文化財センター・大阪歴史博物館、pp.1-8
嶋谷和彦1990a、『堺市文化財調査概要報告書第5冊北花田口遺跡発掘調査概要報告－KHG2地点－』堺市教育委員会
1990b、「近世瓦に見られる堺瓦師の刻印銘(一)」：『摂河泉文化資料』No.41、摂河泉文庫
1999、「近世・堺の瓦屋仲間と刻印瓦」：大阪市文化財協会編『研究紀要』第2号、pp.119-127
清水靖夫1995、『明治前期・昭和前期大阪都市地図』、柏書房
田中清美2008、「遠里小野遺跡から見つかった複弁七弁蓮華文軒丸瓦と楓津廃寺」：大阪市文化財協会編『葦火』136号
趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』VIII、
pp.41-44
直木孝次郎1988、「第5章第1節・大化以前の難波」：『新修大阪市史』第1巻、新修大阪市史編纂委員会、pp.634-636
中九兵衛2004、「甚兵衛と大和川」大阪書籍株式会社
中村浩ほか1997、「四天王寺－報告第37冊－」大谷女子大学資料館
藤井直正・藤本史子ほか1988、「大坂城三の丸跡III-大手口その2-」大手前女子大学史学研究所
藤岡謙次郎1942、「大阪市住吉区遠里小野町弥生式遺跡」：『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』第12輯
大和川・今池遺跡調査会1979、「大和川・今池遺跡－第1地区発掘調査報告－」
1981、「大和川・今池遺跡」III
吉田晶1977、「地域史からみた古代難波」：『難波宮と日本古代国家』難波宮址を守る会編 塙書房、pp.274-281

索引

- | | | | |
|-----------|--------------------|-----------|-------------------|
| う 上町台地 | 1,3,4,27 | つ 津守氏 | 2,6 |
| え 榎津廃寺 | 2,6 | と 陶磁器 | 9,12,13 |
| お 遠里小野遺跡 | 1,2,6 | 東播系須恵器 | 19 |
| か 瓦器 | 5,9,12,13,16,21,25 | 土壙 | 4,5,6,9,13,15,16 |
| 瓦質土器 | 5,12,16,21 | な 難波大道 | 6 |
| 苅田9丁目所在遺跡 | 1 | は 土師器 | 5,9,12,16,21,25 |
| 苅田4丁目所在遺跡 | 6 | ひ 備前焼 | 19,21 |
| く 桑津遺跡 | 4 | 肥前磁器 | 9,19,21 |
| け 畦畔 | 7,9,18,25 | 肥前陶器 | 21 |
| さ サヌカイト剥片 | 3,12,21 | ほ 方形周溝墓 | 3,4 |
| す 須恵器 | 5,9,12,19,21,25 | み 溝 | 3,6,8,12,13,16 |
| 鋤溝 | 8,9,12,13,15,16,25 | 南住吉遺跡 | 4 |
| せ 石核 | 21,23 | や 大和川今池遺跡 | 6 |
| 瀬戸美濃焼陶器 | 21 | 山之内遺跡 | 1,3,4,5,6,7,25,27 |
| 瀬戸美濃焼磁器 | 19 | | |
| た 竪穴建物 | 3,4 | | |
| 丹波焼 | 19 | | |

**Archaeological Reports
of
Yamanouchi Sites in Osaka, Japan**

Volume III

A Report of an Excavation
Prior to the Construction of
the Municipal Apartmenthouse

March 2010

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text.

SD: Ditch

SK: Pit

SR: Paddy field balk

CONTENTS

Foreword

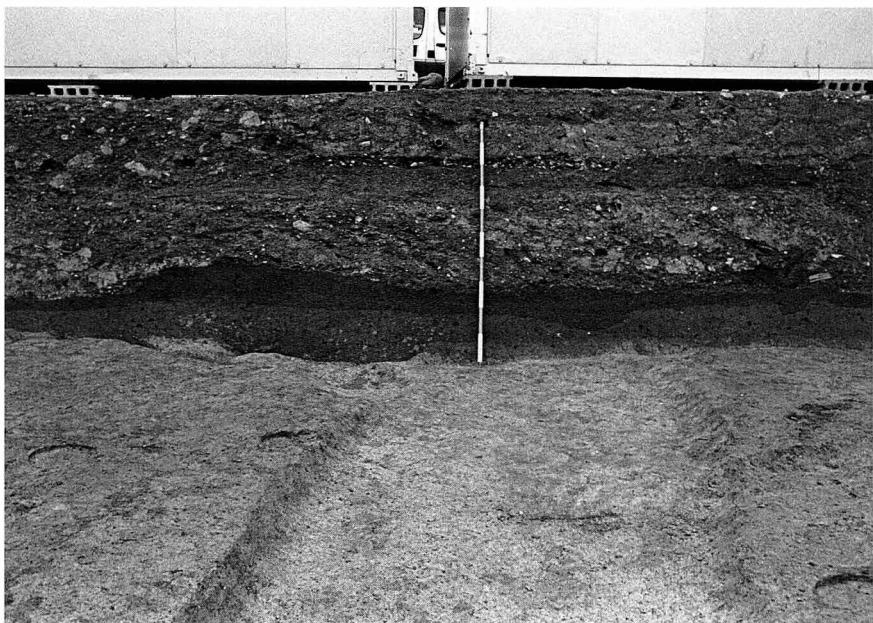
Explanatory notes

Chapter I Site Location and Preceding Investigations	1
S.1 Site Location	1
S.2 Historical Background and Preceding Investigations	3
Chapter II Background and Progress of Reserch	7
Chapter III Investigation Results	9
S.1 Stratigraphy	9
S.2 Features and Remains until the Edo Periods	13
S.3 Features and Remains from the Modern and Present Periods	16
1) The lower Stratum 2 Features	16
2) The upper Stratum 1 Features	18
S.4 Artifacts from each layer	19
Chapter IV Conclusion	25
References and Bibliography	29
Postscript and Index	
English Contents	

報 告 書 抄 錄

図 版

東区 南壁断面
(北から)



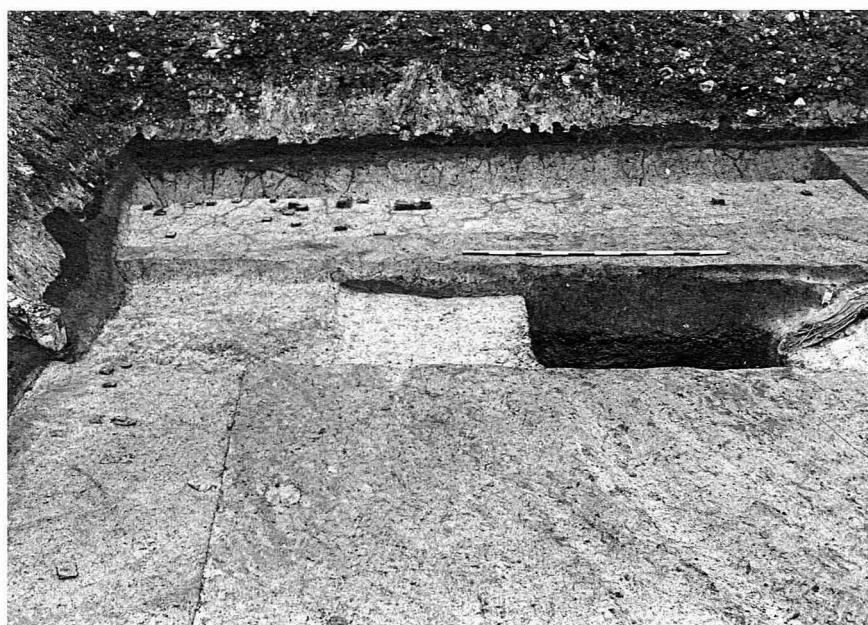
東区 北壁SR101断面
(南から)



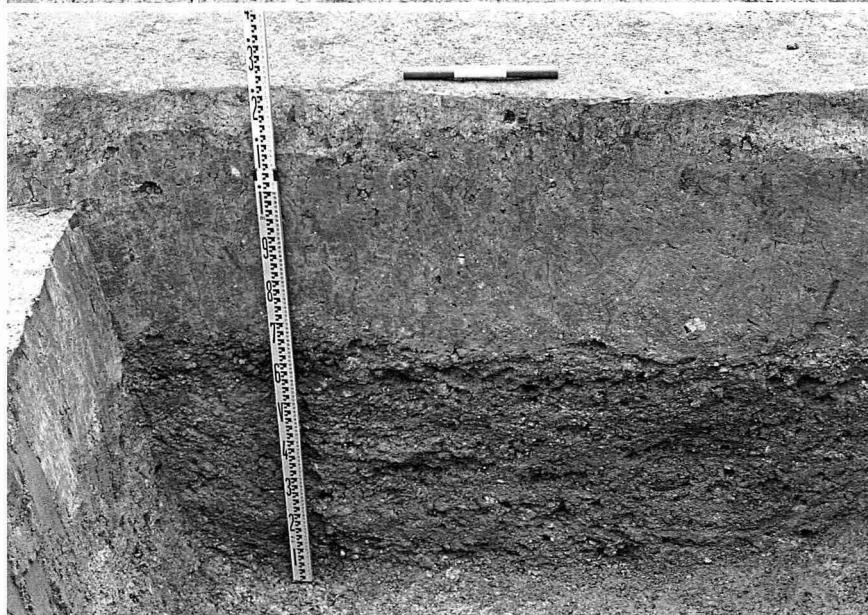
東区 東壁断面
(西から)



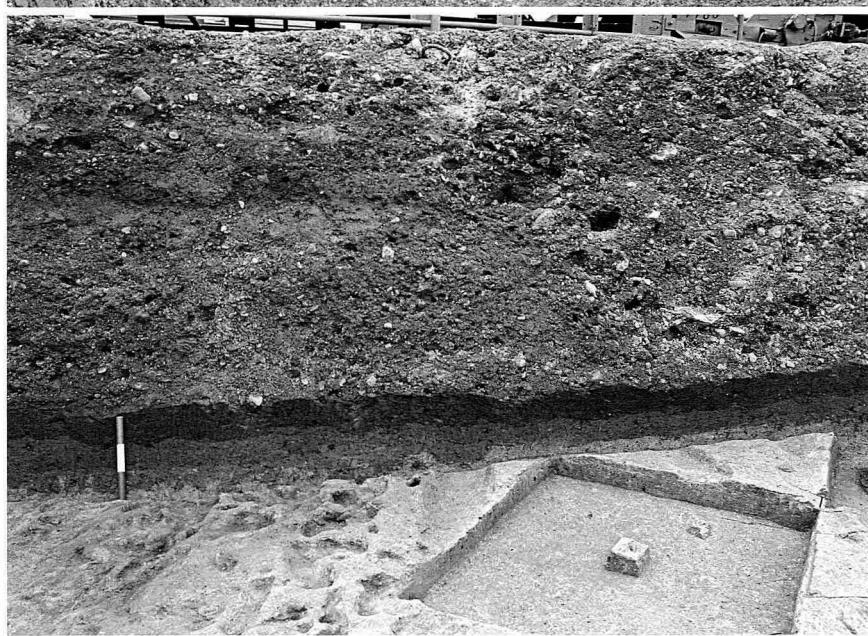
図版二 地層断面(II)



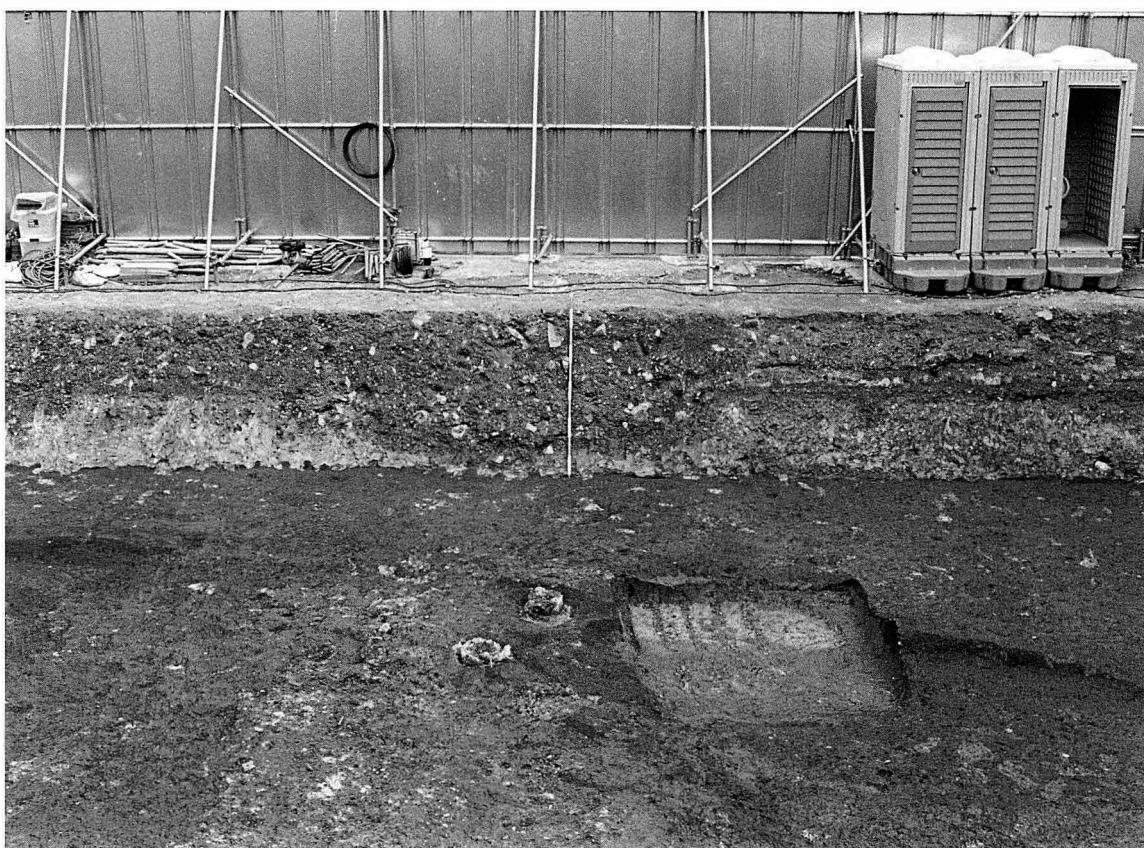
東区 東壁断面
および第5層中の
自然縞の分布状況
(西から)



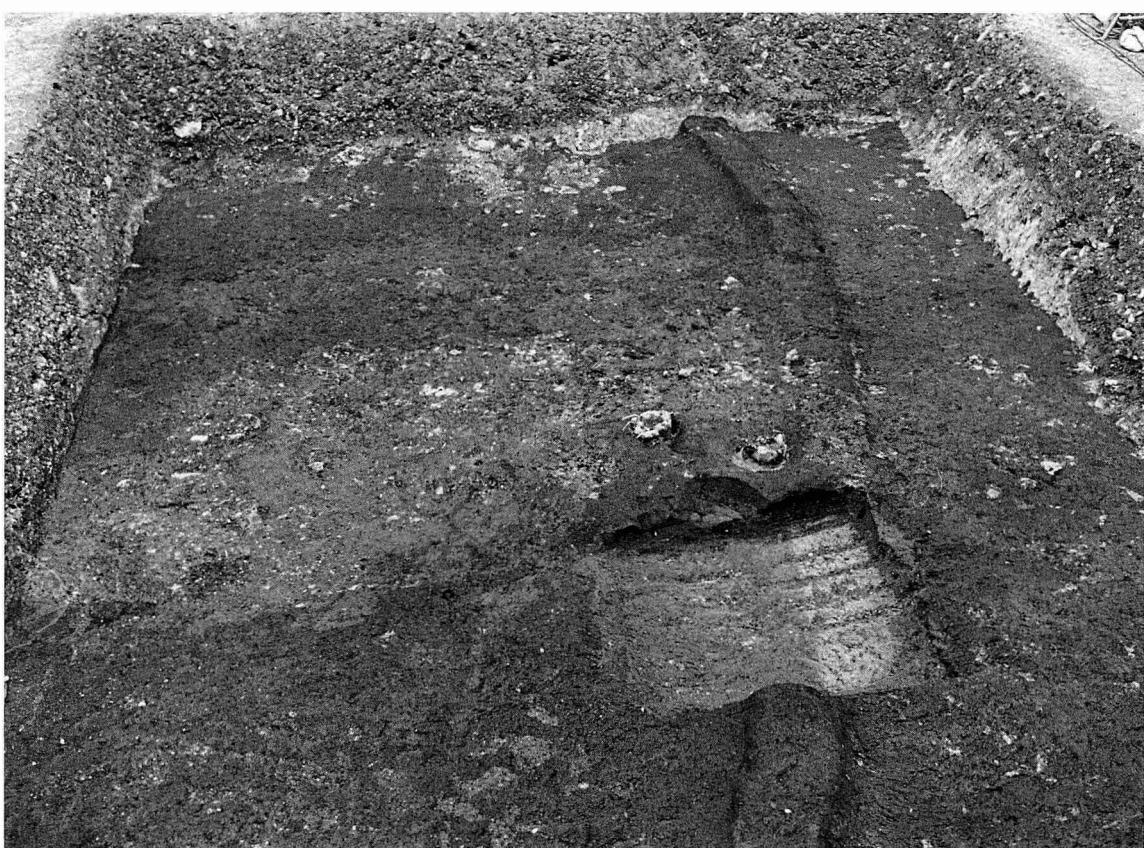
東区 深掘りトレンチ
北壁断面
(南から)



西区 西壁断面
(東から)



東区 SR101全景(西から)



東区 SR101全景(南から)

図版四 近・現代の遺構 (二)



西区 第2層下面遺構検出状況全景(南から)



西区 第2層下面検出遺構全景(南から)



西区 第2・3層下面検出遺構全景(南から)



西区 第2層下面検出の偶蹄類足跡群(南から)

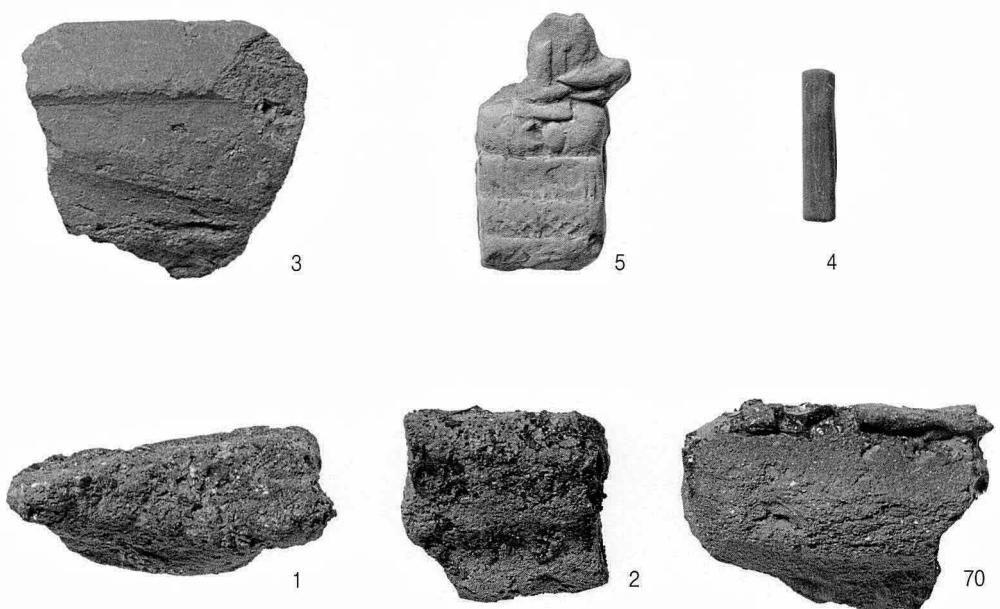
図版六 江戸時代末の遺構



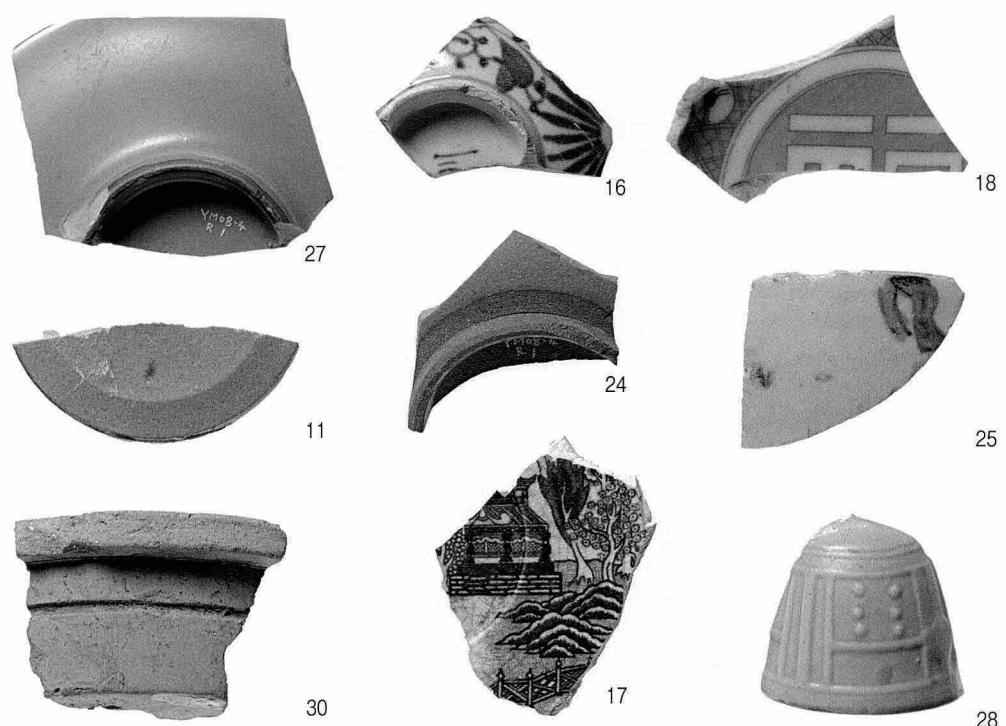
東区 第3層下面の遺構検出状況全景(北から)



東区 第3層下面検出遺構全景(北から)

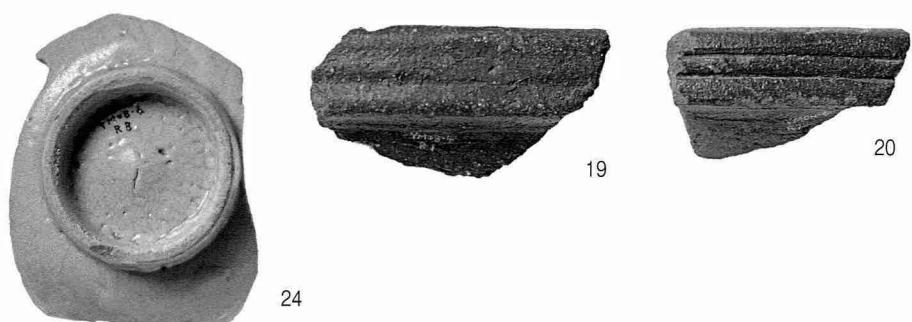


西区：SD207(1)、SD224(2・3・70)、SD226(4・5)

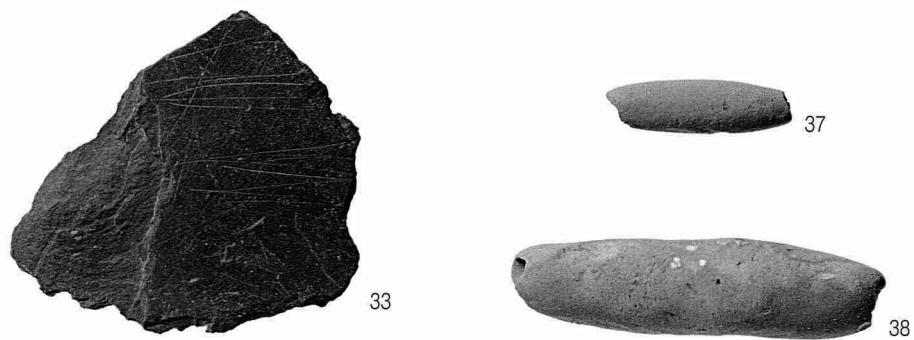
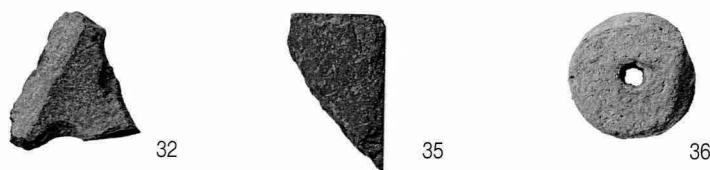


東区第2層(11・16~18・24・25・27・28・30)

図版八
出土遺物
(二)

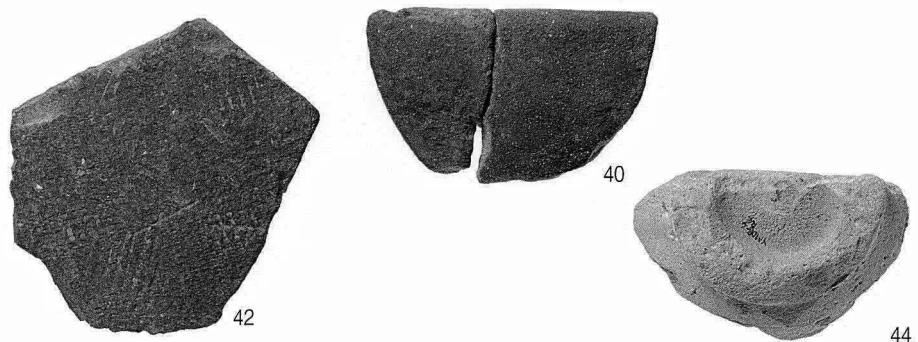
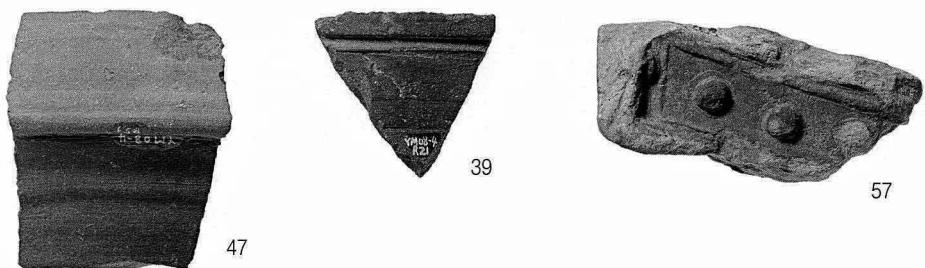


東区第2層(14・15・19・20・24・34)

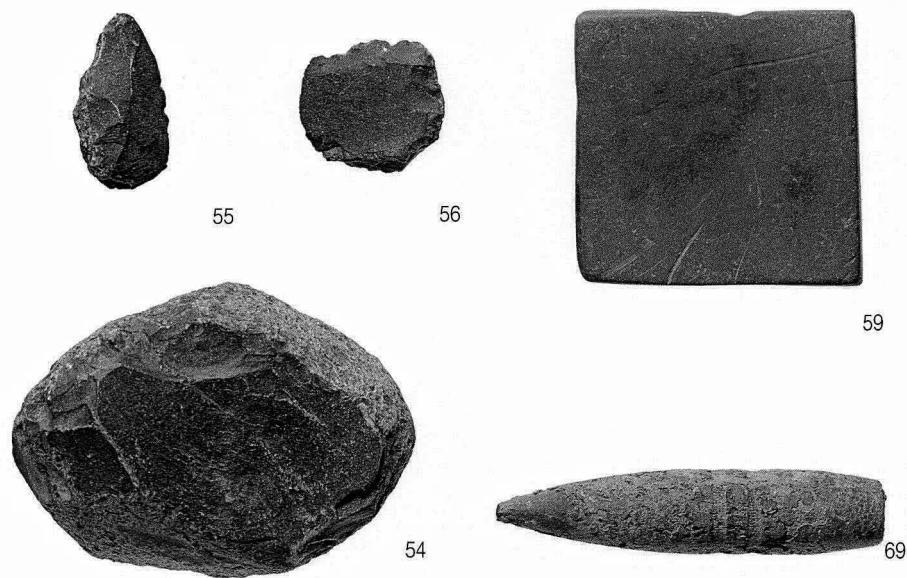


東区第2層(32・33・35~38)

図版九
出土遺物（三）

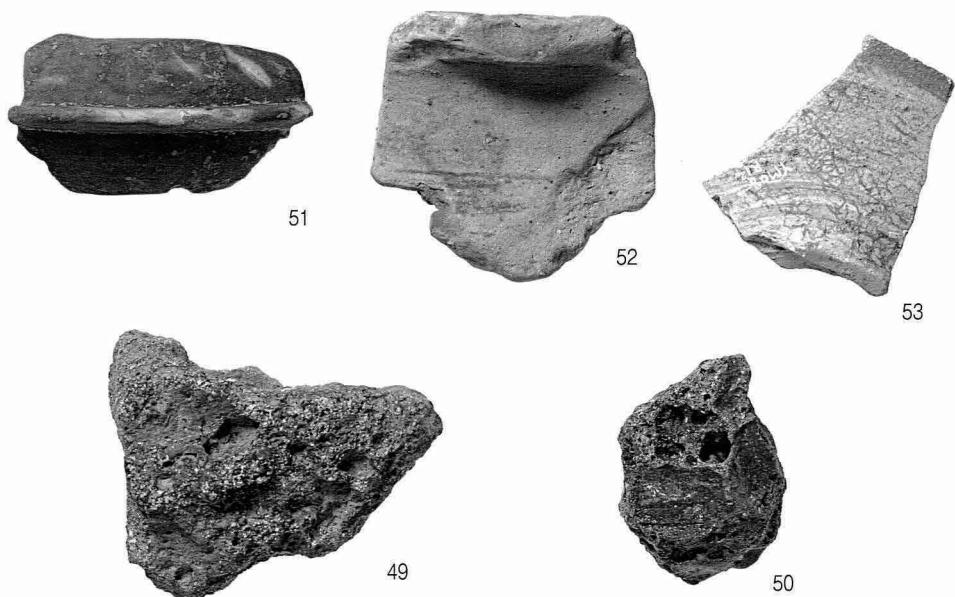


東区第3層(40・44・57)、西区第3層(39・42・47)

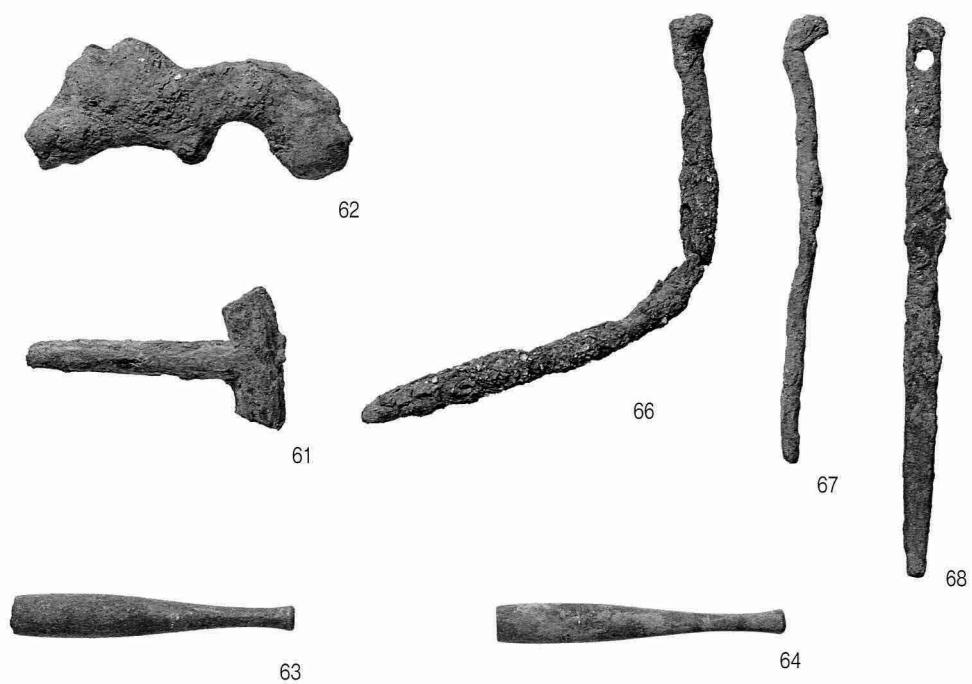


東区第3層(54)、西区第3層(55・56・59・69)

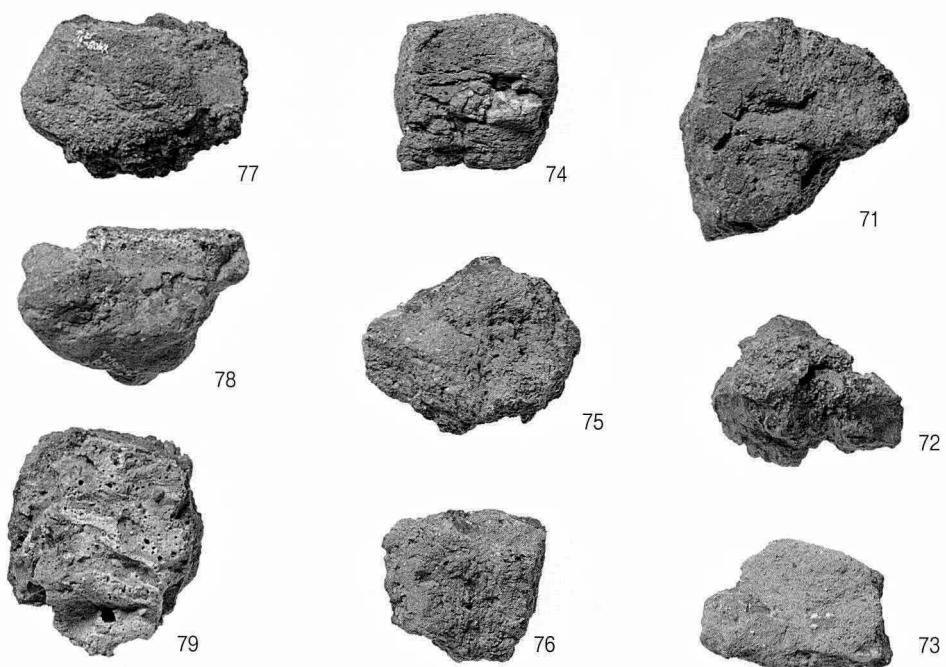
図版一〇 出土遺物(四)



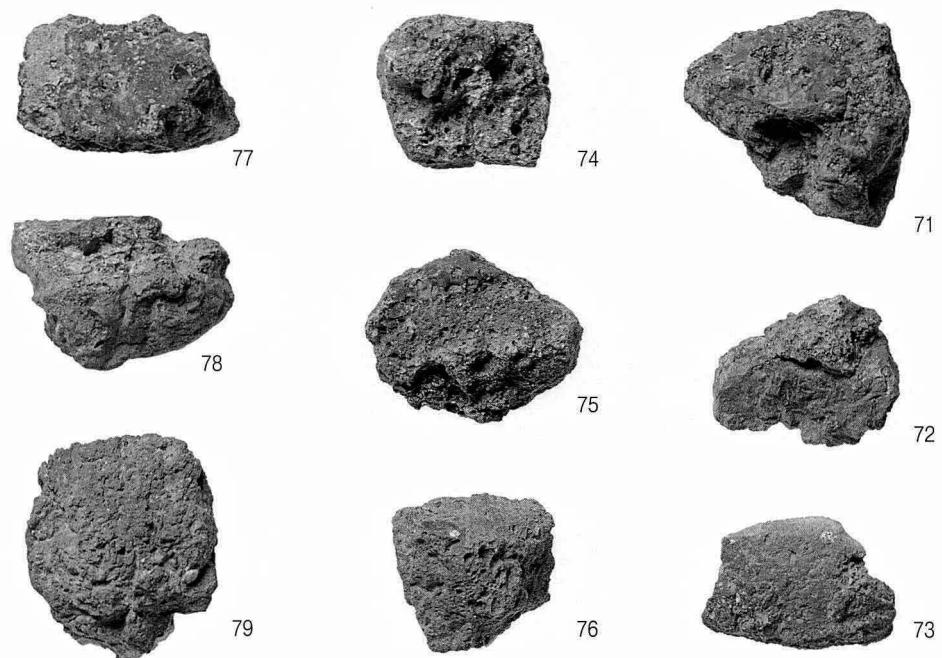
東区第4層(49~53)



東区第2層(61~64・67~68)、第3層(66)



西区第3層(71~76・78・79)、東区第3層(77)



西区第3層(71~76・78・79)、東区第3層(77)

大阪市住吉区 山之内遺跡発掘調査報告Ⅲ

ISBN 978-4-86305-027-3

2010年3月19日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0041 大阪市中央区北浜2-1-14

**Archaeological Reports
of
Yamanouchi Sites in Osaka, Japan**

Volume III

A Report of an Excavation
Prior to the Construction of
the Municipal Apartmenthouse

March 2010

Osaka City Cultural Properties Association